英国春秋

２０１９年（令和元年）秋号
ＩＳＳＵＥ　Ｎｏ．３５
発　行　　英国日本人会

はじめに

秋“豊穣の秋”とはなんと素晴らしい日本語でしょうか。口にするだけで心が豊かになってくるようです。今年は林檎が豊作で、枝もたわわに重たげな中、甘く熟した実をいち早く鳥たちが「お先に」とついばんでしまいます。くちばしの跡のある部分を大きく切り取ってからリンゴジャムを作るのも毎年、今時の仕事です。葡萄が熟すのはもう少しあとで、その翡翠色の玉が次第に色付いてきています。小粒ですので、ほとんどを鳥たちに寄付しています。森にはブラックベリーを摘みに行かねばなりませんし、ドライフラワーにしたラベンダーを昨年のものと差し替えたりと、収穫期は何かと忙しい日々を送るのを常としています。ロンドンを離れると、なだらかな丘陵地では刈り取られた牧草が大きくロール状にまとめられ、そこここに散在するのが見られるのも秋の風物詩、心が和んでくるようです。

今号の『英国春秋』は令和元年秋号です。令和とは最初は聞きなれないせいもあったのでしょう、何となくよそよそしい感じがしていましたが、次第に言い慣れてきました。ものの本によると“令”とは“うるわしい”という意味だそうで、典拠は万葉集の「梅の花の歌の序」からだそうです。

「初春の令月にして、気淑(きよ)く風和(やわ)らぎ、・・・・」

春の初めの麗しい月、空気は澄み風は穏やかで、と訳すとのことです。
ところで私は、“令子”と言う名の方を２人知っています。一人は明治生まれの祖母で、“はな”とか“やす”と“子”の付かない名前が多かった中、彼女だけが令子と呼ばれ、兄姉達から「お前は橋の下で拾われて来た子・・・」と子供の頃よく、からかわれたそうです。もう一人は我々の会員、しっとりした浪花言葉をも話されるユーモアのある方で、きっと彼女のご両親に先見の明があったのでしょうね。
遠く離れていてもわが祖国、元号に因んでどうぞ“うるわしい大和の国”と思えるように、又言われるようになってほしいものです。

先日、「文集投稿者の集い」を少人数でしたが開きました。初めての試みでどんな意見が飛び出すのか、また四方山話で終始するのかと少々危惧していましたが、ライターとしての真面目な意見続出で、とても有意義な会合になりました。

テーマを決め、構想を練る
資料を調べる
同じ言葉を２度使わない
句読点に気を付ける
読者を意識して書く
推敲に推敲を重ねる
ひらめきをメモしておく

などの他、「言葉使いの誤用を嘆く」と言うのもあり、生みの苦しみはあるものの、それが活字となり『英国春秋』と呼ばれる文集となって自分の手元に届けられる喜びは、また格別のものと言う意見が多数を占めました。
“文章を創る”と言う喜びは勿論のことながら、それを読者の方々に読んでもらうという喜びも同じくらいあるというのも出席者の声でしたので、読者の皆様、今後ともどうぞ宜しくご支援くださいますようにお願いいたします。

＊　＊　＊　　も　く　じ　　＊　＊＊

はじめに			２
もくじ			３
英国春秋歌壇	令和の朝	バロー典子	４
英国春秋俳壇	夏の果て	クーパー矩子	５
昭和から平成へ		鶴岡公二	６～　８
八重洲地下街の女の子　－昭和の思い出－		ビドル惠	９～１１
映画『破戒』を観て		映画同好会/文集部	１２～１３
六十六歳半、退職者の感慨		石山望	１４～１５
フェチ			１５～１６
ポエム１	年をとるということ	田村陽子	１７
ポエム２	英国春秋		１８
永住帰国		佐山菫子	１９～２０
盆の１６日は浅川の花火		岡部道	２０～２１
英国春秋俳壇	秋時雨	俳句を学ぶ会	２２
英国春秋俳壇	春の宵	エリオットつや子	２３
ドン・ファンの足跡		小川のり子	２４～２６
人間万事塞翁が馬		渡邉道英	２７～２９
鳩　（２）		ウイリアムズ百子	３０～３２
遠い日の思い出		須永静江	３２～３３
和風の奈良基督教会 －その３　奈良公園誕生－		清瀬みさを	３４～３５

特別寄稿

清瀬みさを氏	（同志社大学文学部教授）
佐山菫子氏	（ユング派心理分析家）
鶴岡公二氏	（在英国日本国特命全権大使）

（アイウエオ順）

英国春秋歌壇

バロー典子

令和の朝に

あらたまの　令和の朝に　友よりの　筆書き和紙の　便り届けり

ひがしにし　二つの世界　身近にて　過ぎこし時の　流れ豊かに

星しぐれ　誰か見守る　気配して　ふと声かけて　周り見るなり

固まりて　激しき雨風　避け守る　羊の群れの　同じ向きして

かっての日　常夏の国に　住みしより　四季ある国に　住まう喜び

四季あらば　時の移ろい　感じつつ　今ある時を　尊く生きむ

ふるさとの　夏より暑き　日のあると　初めて知りぬ　英国の夏

遠来の　友にわが言う　言の葉は　”まず洋式にハグしましょう！

友逝きて　在りし日のこと　偲びおり　かの優しさに　再度触れたり

限りある　命に生きる　われも他も　何残すらむ　愛しき者に

英国春秋俳壇

クーパー絽子

夏の果て

夜寒やほうじ茶呑むたび師を想う

うなずけぬ講釈聞きし師走の夜

付き離れ人愛しきや花茨

みまかりの間際の人や青時雨

旅に出て帰らぬ人よ六月尽

新涼や世迷言を聞き流し

テームズの波急ぎゆく夏の果て

いそいそと抜け裏過ぐる残暑かな

若き友の悩みにつき合う秋の宿

まるめろや役目果ぜしくつろぎに

昭和から平成へ

鶴岡公二

私は昭和 27 年生まれで，外務省入省は昭和 51 年でした。その後平成の御代を越えて令和元年に駐英大使になりました。昭和から平成はまさに私が生まれ学び遊びまた仕事をさせて頂いた時代です。
私が仕事を始めた昭和 51 年は日本の高度成長時期が終わり日本経済は安定期に入りつつありました。初任給が 8 万円程度だったと記憶しています。大学時代の家庭教師のアルバイトでは１時間で５千円から１万円も頂くこともあったので８万円は少ないと思いましたが，入省したばかりの若者には清書やコピー作成などしか割り振られずこんな仕事で給料をもらって良いのかと思ったことを思い出します。さて本稿では私が経験した昭和から平成を振り返ってみたいと思います。昭和 51 年は 1976 年ですので令和元年，2019 年は私の入省から 43 年目になりますので色々とありました。

1. 札幌オリンピック

入省前のことですが，私は昭和 47 年に開催された札幌冬季オリンピックに日本オリンピック委員会に通訳として採用されてアルペンスキーのスタート小屋に入りました。既に大学生になっていたのですが当時は大学騒動の余波が残っていて 2 月に予定されている試験はストによって 3 月に延期されるのが常でした。オリンピックは 2 月中に開催されるので予定通りストがあれば通訳を務めることは可能です。滅多にない機会なのでストが行われることを前提に 2 月初めに札幌入りして競技終了まで約 3 週間東京を離れました。ストは予定通り行われたので戻ってから試験を受けて無事進級しました。アルペン競技の花形と言われる滑降競技はレースを行う斜面の勾配や長さが規定されていて札幌には規定を満たすスキー場はありませんでした。そこで滑降のコースを作るために国立公園である恵庭岳の斜面を切り開いて競技終了後に修復することになりました。滑降競技開催中に私はその頂上にあるスタート小屋に詰めることになりました。急ごしらえのスキー場ですのでリフトは最小限しか動きません。朝一番で頂上に登ると夕刻全てが終了するまで降りて来れません。競技の関係者は選手はもちろん役員もスキーの名手なので降りるのはスキーです。私は少しはスキーができますがオリンピックの滑降コースはまっ逆さまに落ちていくような急勾配の難コースの上に大勢の選手が滑って夕刻気温が下がりコースは雪ではなく全てが凍ってしまった中を降りていくのです。しかも夕闇が訪れていて役員がすいすいと降りていくのについていかないとどこに行くのかも分からなくなってしまう状況でした。その上に私はスキーやスキー靴を持っていなかったので役員が適当に探してきたものを使うことになったのです。１日緊張が張り詰めたスタート小屋で選手と役員の間ではスタート時間の調整など戦績に直結する厳しいやりとりが行われ，全てが無事終わって役員たちは開放感にあふれる豪快な滑走で降りていくのですが，全ての通訳を１人で務め（スタート小屋は極度に狭いので私は英仏の通訳を１人で務めました），疲労困憊しているときに最大の課題である地上に帰還するために借り物のぶかぶかの靴をはいてころばないようにのろのろと降りたのです。もうこのコースは自然に戻りましたので大変貴重な経験をしたのですが，当時の私は必死でした。

２．入省後の世界

昭和の前半は戦争の時代でした。昭和 20 年，1945 年に第二次大戦が終了してからは冷戦が始まり 1989 年の米ソ首脳会談で冷戦の終了が宣言されましたがこの年は昭和63年で昭和の最後の年であり平成元年でした。昭和 20 年の日本の敗戦を含む第二次大戦の終了は冷戦に続きましたが，米ソ２大国の間で核戦争の恐怖を抱えながら恐怖の均衡が成立する中で自由主義陣営は市場経済と自由貿易を推進して経済発展を遂げ，その中で日本は奇跡と言われる高度経済成長を実現したのです。私が入省した昭和５１年は日本がその経済力を背景に世界における存在感を高めつつあったときです。冷戦時代の外交は不思議な

安定感がありました。私は冷戦が終了した直後にワシントンに赴任しましたがその際知己を得たフランシス・フクヤマは歴史の終焉を著し，世界は自由主義の勝利の下に統合されたので今後は争いのない平和な世界が訪れると予言し，世界は軍備の廃止などから可能になる平和の報酬を期待しました。残念ながらその後の世界が平和になったとは到底言えず今日更に困難な国際情勢を迎えていることは申すまでもありません。
しかしながら，テロの恐怖が先進国にまで及ぶ前は確かに世界の課題は経済でした。経済となれば米国に次ぐ経済大国となった日本は大いに世界で活躍できるようになったのです。その具体的な証拠は G7，先進国首脳会議に当初から参加してきたことです。
私は，昭和 54 年に初めて東京で開催された G7 サミットに研修先の米国から帰国直後に関係しました。最若手ですから連絡係ですが，その後は様々な役目でサミットに関与しました。

3. 先進国首脳会議―サミット

第１回東京サミットから２年後のオタワで開催されたサミットから私は８年間ほぼ全てのサミットに総理の英語通訳として総理に同行しました。オタワ，ベルサイユでは鈴木善幸総理，ウイリアムズバーグ，ロンドン，ボン，東京では中曽根康弘総理，トロントでは竹下登総理，パリでは宇野宗佑総理でした。サミットの機会には 2 国間の首脳会談も行われるので私はその通訳も務めましたが総理が交代されても私は続けて通訳を務めていたので各国首脳とは不思議な顔見知りになっていました。

そもそもサミットは 1975 年にジスカールデスタン仏大統領が世界経済について主要国首脳の間で自由に討議をしようと始めたものですが，開催を重ねるにつれて会議は大型化し本来静かに話し合うことを目的としていたものが世界中の注目を集めることになったため報道陣も大勢詰めかけ一種の政治ショーにもなってきました。サミット提唱国の仏が第 2 回目の開催地にベルサイユを選んだのはその流れを更に強めました。社会党出身の大統領であるミッテランは綺麗に修復が完成したまばゆいばかりのベルサイユ宮殿で各国首脳を招いてサミットを開催しました。豪華な装飾の宮殿で社会主義を標榜するミッテラン大統領が会議を主催するのは奇異であると評論する記事もあったと思いますが，素晴らしい会議場で最高のフランス料理を頂きながら開催されたサミットはフランスの栄光を世界に伝える上で大いに貢献したものと思います。会議の始まる前夜にはベルサイユ宮殿の奥に作られた小劇場で前衛的なフランス劇が上演され各国首脳は拍手喝采を送りました。日本の出席者は時差と良く理解できない前衛劇が全員を深い眠りに誘いゆったりとした豪華な客席で熟睡しましたので私はいびきだけは出さないようにとはらはらしながら見守っていました。そのサミットの英国代表はサッチャー首相です。直前にアルゼンチンが突如としてフォークランド諸島に侵攻したのでサッチャー首相は，各国首脳から支持を取り付けることを最大の課題として乗り込んで熱弁を振るって各首脳の説得に努めました。ちょうどその時期に国連安全保障理事会が開催され日本は非常任理事国として出席していたのでサッチャー首相からは鈴木総理に英国決議案への支持を要請され，総理は桜内外相に指示をしてニューヨークの日本大使に英国支持を表明するように指示しました。サミット２日目の夕食会終了後の首脳だけがソファーに座って食後酒を手にしながらの懇談の後でしたから作業は深夜に及びました。

翌年のサミットは米国のウイリアムズバーグでレーガン大統領が主催しました。私は中曽根総理の通訳としてご一緒しました。当時の最大課題はソ連が米国と欧州の離反を狙ってソ連国境沿いに米国には届かないが欧州全域には届く中距離核ミサイル SS20 を配備すると脅迫していたことにどう対応するかでした。米国には届かないのだから SS20 は米国への脅威にはなりません。他方ミサイル攻撃の脅威にさらされる欧州はソ連の言いなりになるしかない状態に置かれる恐れがあります。米欧で共同して対抗するには米国の中距離ミサイルの欧州配備を実現するしかありません。しかしドイツ、イタリアでは米国の中距離ミサイルを国内に配備することに対して国内から反対の声が沸き起こっています。その中でレー

ガン大統領はソ連のミサイル配備を阻止するには米欧が一致して対抗手段としての米国中距離ミサイルの欧州配備を決断するほかないと考えていましたが、議長役でもあるレーガン大統領が自分の見解を欧州首脳に押し付けることは問題を難しくするだけだと発言を控えていました。欧州の首脳は国内事情を抱えて苦悩していました。そこに中曽根総理が発言しました。安全保障は地域別に議論できる問題ではなく欧州の問題はアジアにもつながり、安全保障については世界は不可分である、欧州で米国と同盟国の分断に成功すればソ連はアジアでも同じことをするおそれがある、したがって中距離ミサイル自体を全廃することこそがＧ７の共通目標であるべきだと力説し各国の首脳の賛同を得ました。これを受けてレーガン大統領は議長としての取りまとめでソ連が SS20 を配備するなら欧州に米国の中距離ミサイルを配備することでＧ７が一致したと発表したのです。これがその後の中距離核ミサイルの全廃条約（INF 条約）につながったのです。この画期的な条約が今年廃棄されたのは誠に残念ですが、この条約締結も契機となってソ連は崩壊に進んだのです。
中曽根総理の発言には日本国内で賛否両論が出ました。新聞論調を見た中曽根総理は議論されることは健全であると言われました。それまで経済を中心に発言していた日本の総理が政治安全保障にも発言していくきっかけを作った画期的なサミットでした。
その後も私はサミットに関与してきましたがサミットの話はこのあたりで止めましょう。

４．平成の仕事

私は平成時代基本的に外務本省に勤務して様々な案件を担当しました。国際法関係の仕事を長く担当し，国際法局長も務めました。戦後の国際秩序は平和条約をはじめとする国際法に基づくものです。日本の発展もその中でこそ可能でした。だからこそ日本は率先して国際法を遵守すべきだと思い，日本の外交が国際法を最大限尊重するように努力しました。担当した事務の一つが国際刑事裁判所の設立につながる準備作業でした。国連の法律委員会で各国の代表と議論しました。その際，私が最も緊密に協力したのは米英両国の専門家です。米国は残念ながら大統領が訴追される可能性のある国際刑事裁判所には加盟しませんでしたが英国は加盟しました。日本も加盟しており現在同裁判所に判事を送り込むと共に最大の財政支援を行っています。このような国際社会の基本的枠組みの構築に関与できたのは仕事冥利に尽きませんが，これも戦後の秩序作りが平成時代には続いていたためです。同様に経済面ではウルグアイラウンドに関与して WTO 協定の一部に含まれるサービス協定の策定に参加しました。いくつかの条文は私が考案したものです。日本の国力が世界で認められ時代が求める課題を担当できたお陰で楽しく仕事ができました。平成時代は戦後を終わらせて明るい未来を作る上で必要な国際秩序を各国が協力して構築した時代だったと思います。英国大使に任命される前に担当した TPP 交渉もその一つでしたが，交渉妥結後に米国が離脱したのはその後の国際情勢をうかがわせるものでした。

まさしく令和に入った今は国際社会はより複雑で困難な課題を多く抱えています。これからの課題に向かっていく後輩の苦労は計り知れないものがあると思います。
次世代により良い世界を引き継ぐことができたか自信がありませんが，少なくとも平成時代に与えられた課題には真剣に取り組み一定の成果を上げたものと思います。令和時代にも後輩が世界のために良い成果を国際協力の精神で出し続けることを期待したいと思います。

八重洲地下街の女の子
－昭和の思い出 －

ビドル　惠

私の記憶している“昭和”はパッと思い付くままに羅列しても、日米安保条約の改定と闘争、東海道新幹線の開通、夏冬のオリンピックに万国博、高度経済成長の陰に潜む公害や汚染問題、大学紛争の激化、三島由紀夫、沖縄返還と海洋博、石油危機、ロッキード疑惑、東京ディズニーランド開園と日航機墜落事故など、政治、経済、文化のあらゆる面で激しい変動の時代だった。それでも台風や地震/津波による大災害や、エイズ薬害、バブルが崩壊した後に夢と行き場を失い、心を病んだ為の異常な連続殺人や、宗教絡みの事件が相次いだ“平成”と違って、昭和の人々はひたすら生活の向上を求め、国民全員が一団となって邁進する事が出来たと思う。私個人に於いてもそれは同様で、経済成長の波の届くのが比較的遅かった北海道の片田舎でも、きちんと教育を受けられたし、我家が貧困から抜け出した後は独り立ちして自分の夢を追い続けた。そしてそれが可能だった時代に生まれて幸せだった。

四日市の公害

そんな昭和の思い出として何を書こうか～と悩んだ挙句、このタイトルになったのは、春号で私は、売り場を走り回って小煩い子供を、念力で転ばせてほくそ笑んでいた～と書いたが、その汚名挽回(？)に、ちょっとは良い事もした話を書こうと思ったからだ。

昭和 49(1974)年から 56(1981)年迄、私は化粧品と薬の販売会社Kに勤めた。K社は大阪の住之江に本社を構え、東京に支社(東京本部)と、販売店をテナントの形で日本全国の主要都市ターミナル、ショッピングモールに数多く出していた。当時でも、従業員数 2,300 人、売上 500 億を誇る会社だった。私は札幌パルコ店オープンの際に現地採用されたが、3 ヶ月の研修を受けた時に、東京の魅力に取り憑かれてしまい(東京の美術学校に行きたかった夢もあった)、そのまま東京勤務を希望したのである。

会社は一見華やかな商売の割に頑固で古いところが有って、大卒の男性が店長コースを真っしぐらに進み、薬剤師が医療品部門、我々高卒の女性群が化粧品部門を任されて、各化粧品メーカーから派遣されてくる美容部員(資生堂、カネボウ、コーセー、マックスファクター、レブロンなど)を統率するという境界線がしっかりと引かれていた。何年勤めても女性が店長に昇進する事は出来無かったが、反面“働き過ぎ日本”が考え直されて週休二日制が言われると、我が社は直ぐにこれを導入。ただし、土日祭日、年末年始が稼ぎ時の為に、取れる休みは平日のみだった。

新製品の研修会

他社と同じ年２回の社員旅行以外に、５年以上勤務すると海外旅行(女性はハワイ、男性は香港)のご褒びが貰え、更に女性群には各化粧品メーカーから、新製品の研修会(都心ホテルで開かれ、半日以上を要するので食事付き)が年に其々２回と、カネボウから実績に応じた謝礼旅行(二泊三日)の招待を受けた。と書いて行くと、何やら一年中遊んでいるように思われるが、そこはそれ、お客様相手の仕事ゆえ、ストレスの溜まる事が結構ありまして…… 精神衛生上、必要な事だったと声を大にして言う。

カネボウの謝礼旅行で鹿児島へ

研修が終わったばかりの新人は先ず大型店に送られ、先輩の指導の元で仕事を覚えるのが決まりで、私の初勤務は東京駅の八重洲地下街店だった。新人は当然の如く早番出勤し、開店前にはお仕着せのピンク衣を羽織って、店頭にディスプレイのワゴンやコンテナーを引っ張り出し、並んでいる商品にハタキをかけ、床のモップがけを済ませる。そして、ポツポツ入り始めるお客様の対応をしながら、遅番の先輩や美容部員が出勤して来るまでに、搬入された品物を並べ、化粧品カウンターや鏡を磨いて回るのが仕事だった。

その上店長は大阪の人で河内弁を話したから、そのテンポの良い喋りと響のキツさに慣れるのも一仕事だった。

そうしたある日、いつも通り商品を店頭に出して掃除を始めた私の腕に、何か小さな黒っぽい塊が、いきなりしがみ付いて来てビックリした事があった。落ち着いて見下ろすと、目を真っ赤に泣き腫らしたオカッパ頭の女の子だった。しゃくり上げながらも「お爺ちゃんとお婆ちゃんに逸れた…」とはっきり言い、私の腕を掴んで離さなかったので、私は「店長、迷子さんのようです」と声を張り上げた。

マックスファクターの美容部員とピンクの衣の私

店長が奥から出て来て「保安事務所に迷子さんです～言うて連れて行き」と言い「あんまり遅うならんといてや～」の言葉を後ろに、その子と手を繋いで店を出た。実のところ、八重洲地下街の全容も保安事務所の場所も未だうろ覚えの私は、時々他の店の人に聞きながら行ったから、早朝で閑散としている地下街で、家族と逸れてしまった小さな子供には、どれ程心細い事だったろうかと思った。

やっとたどり着いた保安事務所には、上っ張りを着た中年の男性ばかりが三人程居て、私が「迷子さんです」と伝えると慣れたもので、「はい、そこに座って」と壁際に並べられた椅子を指し示し、「お名前は？ お年は？ 誰と逸れたのかな？」と聞いて行く。8歳だと言う〇〇子ちゃんはこの時には随分落ち着いたらしく、氏名をハッキリと言い「お爺ちゃんお婆ちゃんと一緒に、〇〇時の列車で、〇〇へ帰るところです」としっかり答える事も出来たので感心した。壁の時計を見るとその列車の出発時間が迫っており、女の子は「置いて行かれるかも知れない」と不安を振り返して再び泣き出しそうになったが、事務所の小父さん達は「大事なお孫さんを置いては行かないから、安心しなさい」と言い「今、駅の構内と地下街、両方に放送して貰っているからね、直ぐに来てくれるよ」と慰めるのであった。

私はそろそろ店に戻らねば～と思い「じゃあ、後はお任せして、私はこれで失礼してもよろしいでしょうか？」と言ったところ(女の子はまだ私の手を握りしめていた)、「むさい小父さんばかりの所に置いて行かれたら、この子も不安でしょう、祖父母さんに会えるまで居てやってくださいよ」と言われたので、それもそうだと思い直し、その子と並んで座って待つ事にした。

それからじっくりとその子を観察してみると、女の子は真っ黒に日焼けして健康そう、華奢な都会のお嬢ちゃんと違って“元気で素朴な田舎の子”を絵に描いたようだった。そして「もうすぐ会えるからね」と言う私に、こっくんと頷いて真っ直ぐ見つめる目は、意思が強そうだった。私の小さい頃は人見知りをして、大人と口を聞くことすら出来なかったから、これが私だったら、誰かが声をかけてくれるまで、座り込んで泣くだけだったかも知れないなァ～などと思った。

この子はパニック状態に陥っても、ちゃんと自力で大人の女の人(害を為さぬ)を見つけて、助けを求める事が出来たのだ。泣きじゃくった後のシャックリのような身体の震えが、か弱さを感じさせるけれども、結構しっかりした学級委員タイプで、「夏休みには、爺ちゃん婆ちゃんと一緒に(或いは訪れたのかも？)東京見物に行くんだよ」と吹聴して、学校で皆んなに「良いなぁ～」と羨ましがられて、得意だったかも知れない。

暫くして(場所が分かりにくいので、こちらも多分、人に尋ね尋ねして来たと思う)、祖父母さんが事務所に血相を変えてやって来、緊張の解れた女の子が号泣して抱きついて、事態はハッピーエンド。祖父さん曰く「地下街で朝御飯を食べて、私が会計済ませている間に、これ(奥さん)と手洗に行ったけれど、先に出たらしく…」との事、「よかったねー」と女の子に声をかけ、ちょっとだけ良い気分になって店に戻った。

ルンルン気分で元来たとおりに帰ると、地下街は既に全店が営業を開始しており、人出もグンっと増えていた。時計を見ると店を出てから小一時間は悠に経っており、店長が頭から湯気を立てて待って居るのが見えた。私は大慌てで「すみませ～ん、遅くなりましたァ」と駆け込んだが、両の拳を腰に当て仁王立ちしたままの店長に「今まで何しとったんやーっ!!」と頭ごなしにどやしつけられた。

「親御さんにお渡しするまで付き添ってました…」と答えると、「何やて〜っ！この開店前で大忙しの時に、そんなもん事務所に預けたら、とっとと帰ってこんかい！この阿呆〜っ !!」と言われてショック。確かに一時間は長過ぎたかも知れないけれど、此処で大阪弁が出来たなら「なに言っとんや〜、荷物でもあるまいしポーンっとほかして“ほな、宜しく”なんて薄情なこと、出来まっかいな！」と言い返してやりたいところ。それが叶わぬ私はグッとこらえ「申し訳ありませんでした」と頭を下げたが、その刹那、店長の顔が私の後方を見て凍りついているのに気付いた。何事かと振り向いて見るとそこには、先ほどの女の子と祖父母さんが立って居たのである。

祖父さんは真っ直ぐ店長に歩み寄ると、「うちの孫が、大変お世話になりました。私ら大事な孫を見失って、何かあったら息子に会わせる顔が無い…と生きた心地がしませんでした。こちらさんのお陰で無事に会える事が出来ました、本当にありがとうございます。これはつまらん物ですが、皆さんで召し上がって下さい」と菓子折りを差し出したのであった。

「いえいえ、こちらは当然の事をしただけです」と言いながら、それを受け取った時の、店長の罰の悪そうな顔。あれは、一生忘れられないものを見たなァ〜 と言う気分でしたね。祖父さんは、私がどやしつけられて居るところを見たのかな？ お孫さんの事を“そんなもん”と言ったのを、聞かれてなければ良いけれど。案外全部見てしまっても、そこはそれ大人の事。無視をするのが一番と決め、上司である店長に直接礼を言ったものと思われるが、私には「それ以上、叱らんで下さい」の意味も込められていたのでは〜と解釈した。

それから私は自分の名前は勿論の事、どの店に勤務しているかも伝えなかったのに、どうして此処が分かったのだろうか(跡を付けられた覚えは無い)とも思ったが、ピンク衣には胸にしっかりと社名が刺繍されてある事にハタと気が付いた。祖父さんは目敏く社名を読み取って、保安事務所の人に店の場所を聞き、私がプラプラ歩いている間に、真っ直ぐ(菓子折りを購入して)お礼に来て下さったのだろう。そのタイミングの良さ(悪さ?)に驚いた。今はスッカリ元気を取り戻した女の子に「もう、手を離したら駄目よ」と言うと、ニッコリと笑顔が帰ってきた。

何度も何度も頭を下げながら駅へ向かう三人を、私は(店長と一緒に)店の前まで出て見送った。この頃には、どやしつけられてムッとした気分も収まっていたので、店長に「さッ、もう仕事に戻ってや」と言われると、私は「はいっ!」と、思いっきり良い返事をして、床のモップがけに取り掛かったのである。

先程の店長の顔を思い出して時折ニヤつきながら、菓子折りの中身は何かなぁ〜とか、夏休みが終わったらあの子は、お爺ちゃんお婆ちゃんと一緒に東京へ行った事や、東京駅の地下街で迷子になった事、優しいお姉さんに(二十歳前だったので小母さんでは無いぞ！)助けてもらった事などを、作文に書くのかな？ それとも迷子になった事は、シッカリ娘としては恥ずかしいから、秘密にするのかな？ だとしても私のこと、覚えていてくれると良いなぁ〜 などと思った。

この件があった為とは思いたく無いが、私は間もなく横浜ジョイナス・地下街店への移動を命ぜられ、以後、新宿地下街店、池袋西口店、池袋東口パルコ店を２年の間に転々とした。そして一人前になると比較的小さな店、東部線沿いの東武ストア内の店(高島平、東武練馬、成増、西新井)を、店長と薬剤師と私の三人組みで任せられるようになった。

Ｋ社は大阪と東京の二箇所に社員寮を持っていたので、地方出身の私は先ず此処に住み込み、販売員として５年間働いて(ハワイ旅行にも行った)資金を貯めた後、我儘を言って５時で終了する本部の事務所(販売企画部)勤務に替えてもらい、夜間の美術学校(グラフィック・デザイン基礎科とイラストレーション・コース)に通い始めた。そして、昭和 57(1982)年には在学中にも関わらず、運良く広告代理店への転職が叶ったから、この会社にはとても感謝している。

勤続５年のハワイ旅行

映画『破戒』を観て

映画同好会・文集部

映画同好会主催の２月の観賞会は『破戒』でした。ウォーバーグ啓子さんの物語の紹介で始まり、あと終了後簡単な感想会が開かれました。当初は、“座談会”形式を考えていましたが、発言者の名前を記することなしの単なる箇条書きスタイルに終わってしまいましたこと、お詫びいたします。又、かっては映画助監督として活躍された渡邊道英さんからも、彼ならぬではの映画界のインサイドストーリを加えての、『破戒』紹介文をいただきましたので、合わせ掲載させていただきます。

島崎藤村が小説「破戒」を自費出版したのが１９０６年、それから半世紀近くを経て、大映が市川雷蔵の主人公瀬川丑松で映画化したのが１９６２年。これは言わずと知れた「部落民」のテーマを真正面から取り組んだ映画である。人間の恥部と呼ぶべき差別意識に焦点を縛り、自分の出自を隠す主人公丑松を縦軸に、彼に絡む親友や知人たちが織り成す人間模様を横軸として描かれたものである。雪深い千曲川の流れに沿う寒村が舞台となり、モノカラーで描き出される全編には藤村の悲愴的な詩情が溢れんばかりである。

＊　一頭の黒牛が、突然牛飼いを目がけて猛進、その角で彼を一突きして空中に高く投げ出してしまう導入部が非常に印象的である。この事故で主人公丑松の父親が亡くなるのだが、彼は生前息子に、自分たちが部落民であることを隠せと厳しく言い聞かせてきた本人である。そして人を殺してしまったこのどう猛な牛は、直ちに屠殺場送りとなり、解体された肉片がリヤカーに乗せられて各所に運び去られる。これらの作業に黙々と従事する“部落民”の姿が数場面描かれているのが、差別され忌み嫌われても、それでも生きるために穢れた仕事をせざるを得ない彼らの運命を強調しているかのようである。黒牛・事故死・通夜・屠殺場と解体労務者たちのシーンがこの映画の核心に触れんばかりに最初から数分続く。

＊　内省的で自分の出身をひた隠しに隠しながらも、時には、若者らしいヒーローへの熱情は隠すことが出来ず、又、彼を取り巻く人々、親友、知人、生徒たちに対する思いやりは誠意に溢れる・・・瀬川丑松役の市川雷蔵はまさに適役で、他に別の俳優を思いつかないほどである。少々冷たさを感じさせる整った顔立ち、演技に生硬さを残しながらそれが返ってプラスの要因となり、苦悩する青年教師瀬川を見事に演じあげた。

島崎藤村

和田夏十のシナリオは原作を読んだ者にも十分満足を与えてくれた。特に猪子蓮太郎（部落民出身の作家・啓蒙家）の妻のセリフが原作以上に挿入されていたのが、女性のシナリオライターであるからと思うのは、穿ち過ぎであろうか。夫が政敵の刃に倒れた後、主人公丑松に向かって、「・・・今の世では人々は部落民にたいし偏見を抱き、蔑視さえしているが、やがて新しい時代と共にそれらが次第にうすれ、いつかは差別があったことさえ忘れ去られてしまう。・・・蓮太郎のように“改革を急いで”命を落とすよりも、時がみつるのを待たれては如何でしょうか・・・」とまるで諭すように語る、原作にない場面がある。
岸田今日子の蓮太郎の妻役は、出番が少ないのに非常に印象的で、しなやかでいながら強靭な意志を持つ人柄にぴったりのように見えた。また原作では、主人公丑松が、テキサスの開拓部落で教員として働くことで終るが、映画では、丑松は猪子の意志をついで「部落民開放運動」を東京で始めると宣言する。勿論、結末は、藤村よりも和田夏十が私の好みである。

＊　部落民の存在は知っているが、日本にいた時も、今も全然気にしていない。

＊　日本では今でも、結婚や就職の際、“部落民出身”が問題になるケースを知っている。
＊　イギリス人に「日本では人種差別がない」と言ったら、「部落民・アイヌ人差別」はどういう事かと逆に反問され、驚いた。
＊　国家的差別である困窮者を見捨ててしまう“棄民”という言葉も話題に上った。20 世紀の初期より開始された移民は米国を問わず他国にもいたらしいが、特に中南米諸国に移住していった一部は、移民ではなく棄民と言われたそうだ。
＊　グーグルで古い部落民居住地図を見ることが出来る。
＊　土屋銀之助役の長門裕之が、鷹揚で快活、それでいて親友思いの丑松の同僚として、この映画に温かさを加えてくれた感がする。
＊　猪子蓮太郎役の三国連太郎が素晴らしい。背が高く彫が深く、ほれぼれとする。
＊　蓮華寺の住職役の中村雁次郎の演技は、生臭坊主の目つき、腰つきが絶妙。それでいて部落民の丑松を理解し同情を寄せる住職役も同時にこなすベテラン役者。
＊　志保役の藤村志保は初々しい演技で薄幸な境遇にも溺れず、内に秘めた芯の強さを感じさせる役で好演。

小川のり子

1　まず最初に「島崎藤村」と言う有名な小説家の代表作とは言え、特殊部落民を主人公とした小説『破戒』の映画化を決断した銀幕最後の大スター「市川雷蔵」と永田社長はじめとする大映京都撮影所のメイン・スタッフに敬意を払いたい。

当時、大映は長く活躍された超ビッグスター『長谷川一夫』に代わって、市川雷蔵、勝新太郎が進出、大映株式会社はもとより日本映画界の先頭になっていた大スターであった。
私が学生の頃（1960～1965）丁度、あの安保闘争で東大の学生であった「樺美智子」さんが　国会議事堂正面玄関で警備員とデモ隊の正面衝突で圧死した、その後、巨大な権力機構の暴力に学生たちは立ち上がれない暗黒の日々を過ごしていました。

そんな中、颯爽と登場したのが市川雷蔵主演の『眠狂四郎』であり、勝新太郎の『座頭市』でした、主人公が伴天連と日本女性の間の子、生まれつきの盲人（めくら）であんま家業をする小悪党。社会的にはアウトローのこうした二人が権力機構に歯向い、弱者を庇って悪の根源を「円月殺法」および「居合い斬り」で殺戮をしていく姿に拍手喝采を送る。映画館は若者で溢れ、大映の収益も大変なものであった。

2　そんな１９６２年、大映社内から企画；藤井浩明、美術；西岡善信　撮影；宮川一夫　照明；岡本健一、録音；大角正夫といった『羅生門』『雨月物語』『山椒大夫』『地獄門』『西鶴一代女』で国際賞を独占したスタッフ達が、この『破戒』の映画化を提案。市川雷蔵が一肌脱いで、市川崑監督夫妻（和田夏十さんは当時ナンバーワンの女流シナリオライター）に頼んだのがきっかけであった由。脚本；和田夏十、市川崑監督、音楽は芥川也寸志。

渡邉道英

六十六歳半、退職者の感慨

石山望

収入が減る

（そんなの当たり前のことでしょ。退職しても収入が減らなかったら、皆早くに辞めちゃうわよ。元々、多くなかったんだし、似たようなものね、、。少ないと言ったって、何しろ何もしなくても貰えるんだから、いいじゃないの、。それも一生よ、アナタ）

—何もしなくていい訳だから、日常生活に「枠組み」というものがなくなる。やりにくい

（いい気なものね、アナタって。働いているときは、あれほど、自由がほしい、自由がほしい、とか散々言ってた癖にさ、。枠組みなんて自分で作ればいいだけのこと、額縁作りを覚えるとか、、）

—通勤に使っていた車を殆んど使わなくなる。勿体無い。車に良くない。

（アナタ、京都議定書忘れたの？地球温暖化で、地球の危機が叫ばれているのよ。少しはエコロジーのことも考えて下さいな。アナタが車を乗らなくなると、どれだけ地球が喜ぶか、。それと、あの乱暴運転でしょう。ほかの運転手もヤレヤレってところね。
いざとなれば、売ればいいんじゃない。もっとも、あんなポンコツ、誰も買いやしないけど、）

—自由時間がありすぎる。退屈

（ああ、もうアナタには呆れたわ。退職の意味がわかってないのね、全然。これからは誰の指図も受けずに、自由に心を遊ばすことが出来る時じゃない、。まあ、そんなご老体では、無理かもね）

—「休日」を待ち遠しく思う楽しみがない

（そう思うんだったら、そういう状況を、自分で作ればいいだけのことでしょ。例えば、ボランティアで、道路掃除を買って出るとかさ、。みんなに喜ばれるし、一石二鳥よ）

—身体を余り動かさない為、太る。よくない

（さあさあ、箒とちりとり持ってボランティア、ボランティア。これで、一石三鳥）

—夜勤の日には酒を飲まなかった。これからは、いつ飲んでもかまわない。よくない

（アナタ、いかにも図太い人間の様に振舞ってるみたいだけど、そんなの神経が鈍いだけよ、。ホントのところは、ケツの小さい小物ね、アナタって。
どう、図星でしょう。小原庄助さんになれる訳ないわよ、心配しなくっても。
それにアナタ、ケチもいいところと見てるの、私。
身上なんか潰せっこないってば、。まあ、第一、身上といえるほどの身上もないけど）

—他の人に会わなくなる。よくない

（アレ、いつもいつも、職場の連中は下らない奴ばかりって、こぼしてたんじゃなかった？そんなのに会っても、会わなくっても同じことよぉ。それほど人様にお会いしたいんだったら、お招きすればいいじゃないの、お宅に。でも、アナタの手料理じゃ、まず誰方も来てくださらないわねエ）

—テレビをもっと観るようになる。よくない

（一寸、ホントのこと言っていいかしら？　こう言っちゃ何だけど、実はね、私、アナタは世間のこと何にも知らない常識はずれだと、兼々思ってたの。だから、ちょうどいい機会よぉ、社会勉強するのに。只、テレビ観てもいいけど、いくら社会勉強たって、ポルノは絶対いけませんよ。これだけはきつく言っときます）

—こんな状態がいつまで続くのやら、。一寸不安

（私の知ったことですか！！そんなぁ、、。もう、ったく、、。不安なんて、誰でも、。その歳になってまだ分らないの。
人間、生きてる限り不安はつきものです。「一寸先は闇」と言うじゃない。先行きのことはだれにもわかんないのよ、。
どうして、人は教会に行ったり、お寺に行ったりすると思ってるの。私だって、不安ですよ，そりゃ）

フェチ

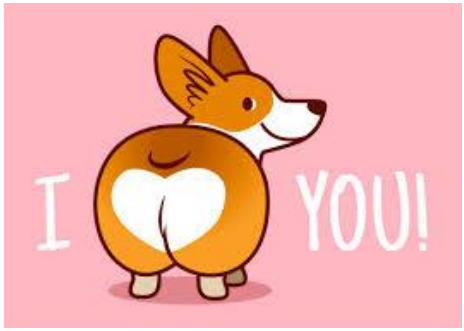
「ボク、髪の毛フェチなんです、、」

「私って、どうしようもなくスカーフフェチなのよねぇ、、」

この頃よく耳にする話である。

「フェチ」は（日本での）俗称、正しくは、そういう性向の事を「フェチシズム（Fetishism)」、それをもつ人を「フェチシスト（Fetishist)」と呼ぶ。元々、人類学、宗教学で使われる言葉。「呪物崇拝」と訳され、ある物体に魂が宿ると信じ、それを崇拝すること。Fetico（護符）に由来する。

然し、この言葉が一般の人々の遥かに大きな関心を惹き始めたのは、それが心理学の分野に導入され、「本来性的関心の対象物であるとは見做されないものが、性の対象となり始め、それのみか、本来の性的関心であるべき対象物に取って代わること」と、定義されたときであろう。



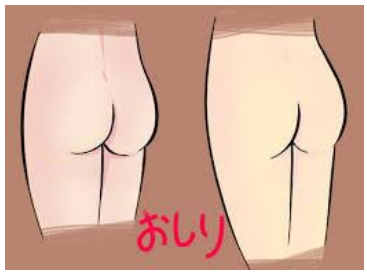
例えば、フェチシズムでよく知られたレザー（皮革)。これはレザーが何かを連想させるか、レザー又はレザーのジャンパーか何か、あるいはそれを身につけた人を見ると、異常な性的興味を抱くというもの。

連想であるから、そのレザージャケットを着ている人に性欲を感ずるということな筈であるが、それがフェチシズムでは、レ

ザーそのものが性欲の対象にまで嵩ずるというのであるから、これが半面「性的倒錯」と巷間呼ばれる所以か。

また、人のお尻に異常な興味を示す人がよくある。
これだけならば、別に何ということのない話であろうが、問題は、お尻そのものが、人間の身体の中で最も性欲をそそる部位と見做され、お尻に異常なほどの性欲を感ずる人とでないと性的関係を結べないか、極端な話、お尻だけで「すべて」事足りるというから、人も様々である。

ただ、この場合、お尻を見て限りなく興奮を覚えるというのは、何か分る気がするが、それがもし「鼻」とか言うことになると、これはもう、私の想像力の及ぶ範囲をよほど広げなければならない。



ところで、私流「横丁のうるさ型」風に言えば、単に「お尻に異常なほどの性欲を感ずる」というだけで、「お尻フェチ」という言葉を使うのは誤用である。

この場合、一般的に言って、「お尻を性的欲望の対象物にする」のは少しもおかしいことではないし、そして、やはり、根本的には、そういう「いいお尻を持った人」と性的関係を結びたいというのが究極の目的であって、「お尻」はそのための手段又はイントロ（Introduction）に過ぎないからである。

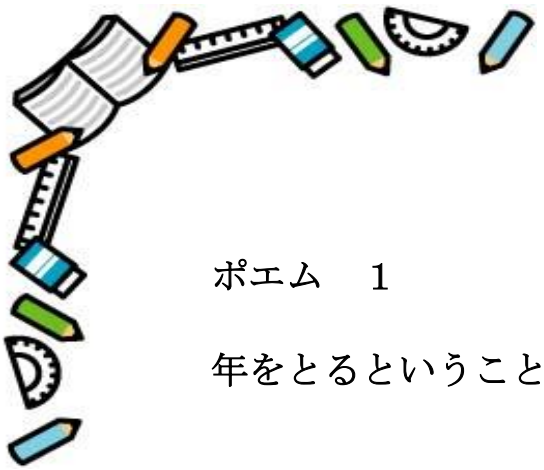
この頃では、この「フェチ」という言葉が過分の市民権を得て、それと同時に本来の意味が希薄になってしまった。然し、この現象は、言葉は生き物、日頃よく経験することであり、何も「フェチ」に限ったことではない。

冒頭、「スカーフフェチ」という言葉を使った女の子が、本来の意味を知ってそう言ったとは到底考えられない。「スカーフが、めっちゃ好き。147 枚持ってる」という程の意味であろうが、これも明らかな誤用。ただ、彼女が夜な夜な人知れず、独りでスカーフを抱いて、オーガズムに浸っている、というのなら話は別である。

この「フェチシズム」に因んで、カールマルクスが言った言葉。

「‘お金‘というのは、元来人間社会の経済を潤滑にするための手段。お金自体に興味を抱くのは、人間関係を倒錯させる、ある種のフェチシズム（物神崇拝）である。」

面白い。



ポエム　１

田村陽子

年をとるということ

ある日、目にゴミが入って拡大鏡を覗いていて気付いたとき

年をとると目がかすむようになるわけは

自分や他人の顔のしみやしわが見えないようになるため

年をとると 耳が聞こえにくくなるわけは

他人の嫌なゴシップが 聞こえないようになるため

年をとると 記憶力がにぶるわけは

いつまでも イヤなことを覚えていないようになるため

年をとると 歩くのが遅くなるわけは

人の欲しがるものを我先にと走ってうばうことがないように

年をとると “食”が細くなるわけは

食べたい盛りの若者に 「どうぞ」と言って譲ってあげるため

このように 年をとると

視力が、聴力が、記憶力が、歩く速度が、食欲が衰えるが

心の豊かさや人を思いやる心は年の数だけ豊かになるのではないだろうか

苦労をして年をとって人間に丸みが出来るのではないだろうか

そうなりたいものだ

ポエム 2

「英国春秋」

JA の会員になって 3 年目に初めて投稿してから、私は書く楽しみを知った

出来たての「英国春秋」を手渡されたとき

それは おいしいごちそうが テーブルに運ばれてくる時のようだ

刷りたてのインクの香りはさながらお料理から漂ってくる いい匂いのようだ

わくわくして 一番先に手をつけるのはどうしても自分の作った料理だ

それは 丁度 集合写真の中で自分の姿を真先に見つけるようなものだ

気恥ずかしいようなうれしいような複雑な気持

お皿にのった どの料理も皆ユニークで 同じものは 2 つとない

塩味のきいたものもあればガーリックの味つけのものもある

甘いものもあれば酸っぱいものもある

皆、すっかり食べ終わるのに時間がかかる

ゆっくり よくかんで 味わいながら 食べるから

人気投票はいらないが美味しかったかどうか、

味つけはどうか 感想が 聞きたいものだ

皆で力を合わせて作った 「英国春秋」という料理

世界に一つしかない手料理

この料理を作るために 材料を提供した人

味見をしたり盛り付けを工夫したりしたシェフ方々

それに、笑顔で注文をとり運んでくれたウェイター、

ウェイトレスの方々、心からありがとう

永住帰国

佐山菫子

英国に在住の日本の方々、お元気でいらっしゃいますか。勉強、訓練、ユング派心理分析家としての資格取得、開業、講義などをしつつ 26 年間ロンドンで過ごしたあと、寄る年波で 5 年前日本に永住帰国した佐山です。その間『英国春秋』にもなんどか寄稿させていただきました。長野県諏訪市の友人のご実家の古い家に徹底的に手を入れ、快適な住処を作り出し、大田舎に住み始めました。諏訪市は諏訪神社のおおもと。大きな神社が四つもあり、七年ごとにお柱祭という大行事が行われます。ご神体である裏山から巨木がなん十本も切り倒され、氏子たち数百人が運びおろします。山を転げ落ちるようにくだり、川をわたり、また引き上げ、到着すると各神社の四隅に一本ずつ建てられます。これがまた大仕事。命を落とす人がでることもあるようです。諏訪市は周囲に八ヶ岳連峰、中央アルプス、北アルプスなどの高山を見晴るかし、住民はそのほとんどが田んぼや畑を持ち、職業としなくなっても、とにかく、作物は作っています。冬場は静まり返りますが、田植えが終わると太陽と緑にあふれ、美しい朝焼け、夕焼けの色彩の多彩さに心を奪われます。真ん中には大きな諏訪湖があり、夏には花火が大人気。20 万人の人々が集まってきます。湖の周りは歩きやすい歩道がしかれ、マラソンやウォーキングが快適にできるようになっています。16 キロの周辺で三つの市が接しています。湖畔には美術館、博物館なども設置され、文化の香りがします。海抜 760m と高いので軽井沢に次いで涼しいように思います。

昔から機械工業が発達しており、かつては、セイコー、今はエプソン。本社はもう、諏訪市にはありませんが機械関係の会社は多いようで、工業団地とよれるところにちらばっています。文学の分野では岩波文庫の岩波茂雄の生誕地であり、葬られたお寺もあります。岩波が出版を始めたときにはもう諏訪ではなかったとのことで、青年たちがリュックを背負って東京の出版社に本を求めて行ったという話が残っており、そのとき以来集められた書籍が風樹文庫という図書館になっています。蔵書の中にはあの有名なミケランジェロの解剖図があり、それはウインザー城の奥でみたことのあるものと全く同じで、感動したことでした。いろんな作家の直筆も展示されています。

この田舎暮らしには大変不便なことがあることに昨今気づかされています。まずは歩行者無視とさえ言いたくなるほどの車優先社会。わたしはロンドン滞在中、65 歳で車の運転をやめましたので、車はなく、１時間も歩くことが無理な時はバス。これが、1，2 時間に１本しか来ません。その時間表にあわせて、わたしの計画を忍耐強くこなすわけです。バス賃はタクシー代にくらべれば、かなり安価なので、タクシーは緊急のときだけ。あとは歩道の不便さです。我が家の前には二車線の県道が走っています。昔は川の流れだったようにまがりくねっているところもあります。そこを歩くのですが、歩道といったものはなく、８０ｃｍにも満たない側溝の上を歩くしかないのです。よろよろと、少しでもふらつけば車に接触しかねません。始終歩いているのは私ぐらいしかいないのではないかと思えてきます。また、車両が脇道から出てくるとき、歩行者への配慮はほぼ皆無。車さえ通ってなければ、堂々とでてくるので危険きわまりありません。それに、市も警察署もお金がないとかで、交通標識も消えかかっており、事故が起こっても、あらたに書き換えることはありません。たくさんにわき道がありますので、ドローンでも飛ばして、町並みをしっかり見定め、一方通行をつくることが大事だと私は思うのですが、友人の間でも賛同は得られません。とにかく、予算が少なく、お金のかかることは振り向いてもらえないのです。人々は車に依存しており、各家庭では一人に一台の車があるとか。土地は広々としていますから、駐車場も大きく、何台も止まっています。大地に根を下ろすことの重要性がしみついているのか、一家に三代の家族が同居している例がほとんどです。住

所も番地がありはしますが、タクシーを頼むときなど我が家の家主の名前を言えばすぐにやってきてくれます。しかも同じ苗字が多いので、氏名の両方を言わねばなりませんが、それで住所がわかるのです。それだけにわたしのように、家を借りている人間というのは、よそ者中のよそ者。それが理解できるまでには長い時間がかかりました。このよそ者性はロンドンで日本人として生きていた経験とはまた、大きく違うものです。

現在、仕事のために、二週間に一度東京に出かけています。セラピー、スパーヴィジョン、勉強会、講義などのためです。特急で２時間あまり。車窓からはまた、すばらしい自然の姿が展開します。しかし、このごろは東京に着くとほっとするようになりました。公共交通の便利さ、なにもかもがあたりまえのように人々を迎え入れてくれているように思えます。
息子一家も東京にいますので、そろそろ東京に落ち着こうかと思っています。長年母国を離れていたあとの大引っ越しの心理的ショックも静かに癒されて、今、また、昔住み慣れた、生き馬の目を抜くといわれる東京に住んでみようと思い始めているのです。

次回はわたしの専門の無意識ということについて、自我と無意識の道行きといったことを書かせていただきたいと思っています。

盆の１６日は浅川の花火

岡部　道

「盆の１６日は浅川の花火♪」と唄われる８月１６日の花火の日は子供のころから一日中空模様を気にしていました。浅川の花火は慰霊花火として３００年以上続いています。お城山の中腹に埋められた地雷火は殊に見事で扇型に炸裂した花火の後ろにお城山がシルエットとなって聳え私たちを喜ばせました。私はこの浅川町大字里白石に生まれました。

学校は４年生までの里白石分校で酒屋の後ろの小高い山の上にありました。酒屋の大きな樽の入ったいくつかの蔵の間を通ってからくねったきざはしを上っていくと最後に急な石段があり、学校に着くと校庭の真ん中から職員室に向かってお辞儀をして教室に入りました。太郎こおろぎの世界です。
春には校庭の周りの桜の散った花びらを笹に刺して遊びました。冬は教室に大きな火鉢が入れられてその上に弁当が積み上げられ、昼は熱いご飯が食べられたのです。この分校に私は一歳上のキヨノさんを負ぶって通いました。負ぶったほうが早く簡単でしたから。かばんは照ちゃんや逸ちゃんが持ってくれました。帰りには負ぶって走っては飛んでるみたいだというキヨノさんを喜ばせました。

キヨノさんは病気のため一年遅れて彼女の弟と一緒に入学したのです。３歳で小児麻痺に罹り手足が不自由でした。片足は足首からねじれて足の甲で歩き、甲にはかかとのようなこぶができていました。両手も不自由で杖を突いていました。私たちのように下駄を履くことはできないので裸足か足袋を履き、曲っている足には袋を足首にくくっていました。5年生になると本校に行くのに４キロの道のりを歩くか汽車に乗らなくてはなりません。キヨノさんの学校教育は４年生までで終わりでした。私は町の学校に慣れるのに精いっぱいでキヨノさんのことを考える余裕はなかったのだと思います。
学校から帰ってはよく彼女の家に遊びに行きました。彼女の母親は行商をしていて、時々付けを払いに来る人があり、彼女が応対していました。そんな時、負ぶってもらって学校に行けたからこうして計算もできるのよと明るく笑って言うキヨノさんでした。高校までは花火の日にはキヨノさんを負ぶってい

きました。後に町長になった父は分校を独立校にして立派な講堂もスイミングプールも出来ました。町は栄えました。

私が東京に出てからもキヨノさんとの交友は変わりませんでした。そのうち家の中にトイレができると四つん這いで行けるため膝から下は退化してキヨノさんは立つことができなくなりました。悲しいことは病気になった母親の看病が思い通りにできないことと嘆いていました。賢くて器用な彼女は編み物を習って器械でなんでも編んでいました。が、甥が年頃になると自分がいては嫁の来手が無かろうと身体障碍者施設に入りました。家から北に１００キロほどのところで春は桃の花に埋まる施設ですが施設の下を通る高速道路を見ては実家に続いていると思いながら走る車を見ていたそうです。

彼女はここで恋をしました。結婚を望んでいましたが家人の反対で果たせませんでした。
私は英国に住んでからは夏休みには５週間帰省していました。キヨノさんもお盆で帰省するのでお盆には会えたのです。友人のダグラスもジェニーも日本に行くたびにキヨノさんをドライブに連れて行ったり帰る施設まで送ったりしてくれました。キヨノさんは毎年カレンダーを送ってくれました。呉服屋さんので豪華な花嫁衣裳ばかりのカレンダーでした。夢の中では私の手足は曲っていないのよとも言っていた彼女でした。

キヨノさんは私が言葉の通じない外国で頑張っているのだから自分も頑張るのだと言っていましたが私は私で我儘と怠け心が出てくると「道さん、動く手も足もあるでしょ」というキヨノさんの声が聞こえてくるのでした。

世界の身障者の年がありました。彼女は福島のキャンペーンガールなりました。英国の身障者の扱いを見て私もキヨノさんを英国に招きたいと日本の飛行機の会社に相談の手紙を出しました。答えは「考えるのも止せ」でした。身体の障碍度が進み重症障害者施設に移ってからは手紙は代筆で来るようになりました。消灯後は唯一明るいトイレで編んでいると靴下や帽子をかぎ針で編んでいてくれました。編み損じたのをほどくと二日分もといてしまうことがあるのよと笑っていました。夕飯の後に全員が薬を飲んで一緒に大便をすると聞いたときはショックでした。

もう２０年以上にもなりますが特に暑い夏がありました。会えるはずだった日に彼女の亡骸が帰ってきました。暑さのために救急車で運ばれていくときの様子からをお葬式に来た施設の人が話してくれました。赤子の時に東京の子供のできない叔母にもらわれて行ったのにその叔母に子供ができ小児麻痺になったからと返されてきた私は誰も要らない子なのよと言ったこともあるキヨノさんでしたが私たちにはいつも明るく賢いキヨノさんでした。

先日福島の震災のひどかった浜通りの代表の高校生 20 人が英国を訪れ UCL で講義を受け，「福島の今」をピカデリーの教会で発表しました。みんな英語がとても上手でした。中には震災から未だ母親が行方不明でもうこの世では会えないと思うと言った女子高校生もいました。8 月 14 日は私たちしゃくなげ会の 4 人がボランティアで 5 人づつのグループを彼らの興味で作った訪れてみたい場所を案内しました。この団体に同行していた新聞記者の一人が子供の数が少なくなって今年３月に閉校になった里白石小学校に取材に行ったとその様子を話してくれました。長く生きているとこういうこともあるんですね。
8 月 17 日に田舎の義姉と電話で話しました。「夕べの花火はどうだった？」「午前中は土砂降りでどうなることかと心配したけれど午後からはからりと晴れて夕方には少し風も出てきたので花火の煙がいい具合に流されてとてもきれいだったよ。」
花火の歴史は続きます。

英国春秋俳壇

俳句を学ぶ会

秋　時　雨

静まりて秋の夜長を綴る文　　日出美バンダースケイフ

秋風にスカーフなびかせ少女行く　　田口邦子

日が暮れて家路いそがす秋の雨　　悦子キング

紅葉柄まといて街に色を添え　　福重久子

秋日和ひときわ映える白いバラ　　藤原栄

秋時雨時を忘れてもの思い　　小野宣美

百年を経てたくましき藤の花　　川西弘子

秋高し切なき声の恋の鹿　　上田陽子

冷気浴び月の光に母偲ぶ　　タミーガフニー

木の実雨喜ぶ孫の手に一杯　　千津子ウインター

たそがれて長い旅路の渡り鳥　　松尾美和子

青嵐絵筆となりて野山染め　　岡部道

待つ人の来ぬ間に一句秋ひざし　　広瀬信子

いつの間に六十路となりてうそ寒し　　由美ウイーラー

英国春秋俳壇

エリオットつや子

春の宵

ざわめきつ牡丹赤い芽ほぐれけり

うらうらと波が波追う春の川

唐草のふろしき美し春の宵

れんぎょうをけちらしながら芝を刈る

もつれ蝶空舞い上がりもう見えぬ

巣立ちして静まりかえる今朝の空

しゃくやくや降る雨重しこうべたれ

さくらんぼ鳥にもうましと見えるらし

雷鳴やあと追いかけてどしゃぶりに

夏夕べ電話とれない留守の猫

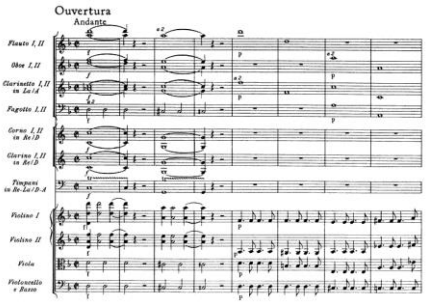
ドン・ファンの足跡

小川のり子

大人達の会話で「あの人は大したドン・ファンね！」と言うのを最初に耳にしたのが、確か私の小学生 5～6 年頃だったと記憶している。話の内容から、“女性にもてるハンサムな男”と勝手に解釈し、“不品行な男”とは決して思わなかった。以来、あっという間に時が流れ、幸か不幸か私の人生ではドン・ファンに出会う機会は皆無であったが、演劇、オペラ、小説、映画等では数知れず出会った。そして、“女を騙す放蕩者”として、彼の好感度がＢからＤに下げられたのは勿論のことである。その腹いせでもないだろうが、彼の捨てゼリフ、「*女であれば美人も醜女（しこめ）もおかまいなしだが、たったひとつ、婆さんだけは　愛の炎が燃えたたぬ・・・*」が舞台から聞こえて来そうである。

数年前、ナショナル劇場で「Damned by Despair」という珍しい芝居が上演された。邦訳が出ていないが、「絶望の果てに」と勝手に名づけている。
物語といえば、パウロという自身の救済に憑りつかれた隠者が、それにはエンリケという男の生き方を見習うのが一番であると天使の姿をした悪魔の言葉に騙されて、ナポリに出かける。見習う男は、恐喝、強盗そして殺人まで平気で犯す極悪人であった。パウロは偽天使の言葉を信じ、この男の生きざまを真似て、やがて盗賊の首領となり悪事の数々を働くようになっていった。お手本男にされたエンリケには長患いの父親がおり、息子に、「自分の罪を悔いて神に懺悔せよ」と諌める。彼は父親の臨終の言葉で、初めて大いなる者の存在を信じるようになる。最後は絞首刑にかけられるのだが、改心したエンリケは、こころ安らかに死んで行くことが出来た。かたやすっかり悪の道に陥ってしまったパウロは神を疑い、そして呪いながら死んで行かねばならなかった。と“信じる者は救われる”の話である。蛇足だが、このエンリケに情婦がいた。彼の数々の悪行を咎めず、ひたすら彼に従う女であった。しかし、この男がナポリをしばらく留守にしているうちに、不具者だが金持ちの男を見つけ彼に鞍替えしてしまう。この彼女の行為をあっぱれと褒めてよいのかどうか、決めかねている。

ここには女を次々にだます浮気者のドン・ファンは出てこないが、この作者のティルソ・デ・モレナこそ“ドン・ファン”の生みの親である。セルヴァンテスと同時代の人で、職業は僧侶、なんと 300 以上の戯曲を書いたとのことだが、現在は 3 分の 1 近くしか残っていないそうだ。お膝元のスペインでも彼の作品はおろか、名前も聞いたことがないという人がいるとも聞く。話は少々脱線して、これは知人、日本の大学でスペイン文学を教える教授から聞いた話である。ある日授業で、「今日はスペイン文学の巨匠、セルヴァンテスについて話したい」と始めたが、生徒からの反応が戻ってこない。そこで彼は慌てて、「ほらあのドン・キホーテの作者」と付けくわえた。すると一人の生徒が嬉しそうに、「先生、知ってる、知ってる、近所にもドンキホーテの店があるよ、なんでも安いんだよねー」と答えたそうである。その時の教授の暗澹たる思いを想像し、誰かにこの話を披露するたびにニヤニヤしてしまう。
話は戻るが、このティルソの作品の一つ、「セビリアの色事師」をベースにフランスの劇作家、モリエールがいわゆる好色家のドン・ファンを創り出した。この“女を騙す”というテーマがよほど気に入られたのか、このあとモーツアルトが「ドン・ジョヴァンニ」に、ゲーテが「ファウスト」にそして最近では、パトリック・マーバーの「ソーホーのドン・ファン」に引き継がれて行く。



好きなオペラの一つに「ドン・ジョヴァンニ」がある。主人公のジョヴァンニはいわゆる色事師で、女を口説くのを“アート”と心得ている男である。人妻はおろか、結婚式当日の村娘にまで言いより、浮気がばれてもめ事が起これば相手を殺してしまう事まで平気でする。
今、アートと書いたように、ただ単に女に言いよるだけではなく、ジョヴァンニは彼なりに何かと努力し、次々と創りだす甘言はもちろん、マンドリンを奏でながらお目当ての女の窓ぎわでセレナ

ードを歌い、恋の手管の完成度を高めて行く。私は昔、マンドリンクラブに属していた時期があった。或る日、若くてハンサムな指揮者から、「ドン・ジョヴァンニのセレナード」の譜面が部員に配られた。当時、オペラはおろかモーツアルトもよく知らなかったが、あの軽快なピッチカートの導入部に続き、心のときめきをトレモロに乗せて歌われる主旋律にすっかり魅了されてしまった。後年、このオペラを観る度に、そしてこのシーンに出会うたびに、若かりし日々を想いだし、舞台のジョヴァンニと一緒に歌い出したいような気持にさせられてしまう。
さて本題に戻り、こうして何かとジョヴァンニは彼なりに努力はするのだが、数々の不行状は止めを知らず、悔悛の情も全くなしで、その上、死神の石像に挑戦してしまった報いで、非業の最期を遂げる。

2 年前、レスター・スクエアーの劇場前で「ソーホーのドン・ファン」の看板に出くわした。チケット売り場で「この芝居は非常に人気があるから安い席は残っていないわ」と急かされ、思い切って大枚をはたいた。多くの観客のお目当ては、作者のパトリック・マーバーではなく、主演のディビット・テナントであるらしかった。私は「Doctor Who」のファンでもないし、また非常に評判の高かった彼の「ハムレット」も見逃していたが、一度は彼の芝居を観てみたいとは思っていた。

このソーホーのドン・ファンはＤＪと呼ばれ、とにかく“女と寝る”ことを生きがいとしている男である。新婚の妻をほっておいて、ボスニアやクロアチアの娼婦たちと遊びほうけ、口説きたい女がいたら、彼女の旦那を事故死に装って抹殺してでも手に入れようと、手段を選ばない。21 世紀のドン・ファンは“アート”などとは面倒なこと言わず、非常に即物的である。そして彼の女性遍歴を従僕にデーターベースで記録させ、ＢとかＣとか勤務評価（？）まで付ける始末である。ソーホー界隈の住人とは言え彼は伯爵の息子であるから財政面では何の心配もいらない。ある夜、スクエアーでたむろしていた乞食から“Rizla” を分けてもらう。彼が礼を言うとその乞食は「アッラーのご加護がありますように！」の後に続けて何がしかの物をねだる。そこでＤＪは自分の高価な 6 千ポンドもするという腕時計を乞食の目前にぶら下げながら、「アッラーの神を罵れ、そしたらこれをお前にやる」と何度も強要する。しかしこの乞食は、「私はけっしてアッラーを冒涜することなんて出来ない」と頑としてこの申し出を拒絶する。ＤＪは、乞食の身でも神の存在を信じて疑わないのに感銘を受けたのか、ただ単に会話が面倒になったのか分からないが、その高価な腕時計を彼に投げやってしまう。ここでは他のドン・ファン物語のように神の存在がどうこうという深刻なシーンはないが、しいて言えばこのＤＪと乞食のやり取りに、宗教が少し顔をのぞかせる。最後は、ＤＪの結婚相手の兄たちが妹の復讐とばかりに、どうしても「悪かった」と謝らない彼をナイフで突き殺してしまう。

こうして、ティルソはドン・ファンの種子を４００年以上前に撒き、現在は、世界中でそれぞれの国のドン・ファン物語が育っている。スペインを皮切りに、フランス、イタリア、ドイツ、イギリスの“色事師譚”が誕生し、ほかに、中近東、東南アジアにもきっと存在することだろう。そして、我が国日本ではどうだろうと思ったとき、女性を口説くテクニックは、他国の誰よりも一段と輝き、世界一だと言っても過言ではないかと思われる人を思いついた。それにティルソよりはるかに古く国産でもあり、私の好感度はＡの人物である。

その名も彼にふさわしく、光源氏の君である。美しい女性ならば、人妻はおろか、ロリータであろうと、斎宮であろうと、また父親の後妻であろうと、言い寄らずにはおれなかった。最愛の人がそばにいて、彼の浮気心を嘆いていることを知りながらも、それを止めることはできなかったようだ。前述のドン・ジョヴァンニでは、従僕のレポレッロが主人の関係した女の詳細をノートに書き入れている。それによると、スペインだけでは 1,003 人、他国の女を入れると合計で 2,065 人に上るそうである。さて、我が君の場合はとなると、紫の上、葵の上、藤壺の宮、女三宮、明石の君、夕顔、六条の御息所、そして摘んだり捨てたりと忙しい関係であった末摘花や花散る里、その上にお召し抱えの女房達を入れると数え切れないほどであったらしい。彼の恋の手管はまるで芸術の域に達せんばかりで、高貴な生まれに加え、立ち振る舞いは気品にあふれ、決して無理強いはせぬが、最後まで自分の気持ちを押しとおす。歌を詠み、弦楽をたしなみ、香を焚きしめた衣服の優雅な身のこなしは、時には女性の方から口説かれるのを待ちたい気がする人であったらしい。

ただ興味深いことは、彼にも良心の呵責はあったのだろうが、それでは神の存在はどうだったかと聞かれると、はたと困ってしまう。前述の「絶望の果てに」も神の存在の有無を問う結末だったし、ドン・ジョヴァンニも石像が神罰として彼を地獄の炎にさらしてしまう。ソーホーのドン・ファンも最後まで悔恨の情を示さなかったので、天誅とばかりに男たちに殺されてしまう。しかし、源氏の君は自分の恋には何かと苦悩するが、自分の行為に対し直接神に謝罪することはなかったようだ。倫理観に神の存在を考慮に入れない人生観は、光源氏を始め日本人独自のものか、そうでないのか気になる点である。我々は日頃、物の哀れとか無常観を口にして、それを情緒的にとらえるのには長けている。この無常観こそ仏の教えの真髄であるのだろうが、諦めが先立ち苦から逃れるための真剣な神との対峙、善か悪かを激しく自問する意識などは希薄のように思われる。

槿（朝顔）の巻では、光源氏が、前に斎宮であった朝顔の宮を想いつめ、再三通って行く。がいつも彼女から冷ややかな態度をとられ、すっかり気落ちしてしまう。その時に詠んだ歌が「人知れず神のゆるしを待ちしまに　ここらつれなき世を過ぐすかな」と、人知れずあなたを待っていたと嘆けば、やはり今でも神のお咎めを受けるでしょう、と宮からの返歌を受けてしまう。貴女の神に仕える仕事が終わってしまったのですから、私と浮名を流しても構わないでしょう、とは少々無責任なはなしである。
最愛の人、紫の上を喪い、最後は儚い世の移ろいを嘆き出家を思い立つ。が、光源氏の出家はおろか、光源氏の死についての記述は、この物語は一言も触れていない。

この「ドン・ファン」のテーマは古今東西、語られ歌い続けられてきた。しかしこの辺でそろそろ「ドンニャ・ジョヴァンナ」や「ドンニャ・ファナ」の物語が登場してもおかしくないと思われるのだが・・・。それとも女性にとっては「恋の冒険」は向かないのかも知れない。

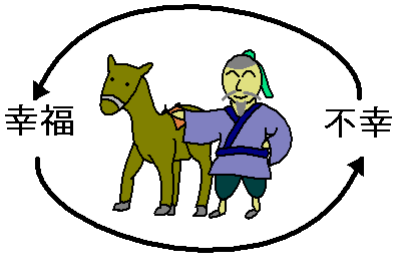
コヴィエッロ　「ところで、ドン・ジョヴァンニ様、盲目の女に会っても、気に入られますか？」
ドン・ジョヴァンニ　「もちろん、盲目の女だって好きさ。恋に溺れる質だろうからな。一度心に入り込めば、他の男を愛する気づかいもなかろうというものさ。目という心の扉が閉まっておる以上はな」
コヴィエッロ　「歯のない女は？」
ドン・ジョヴァンニ　「大いに結構、わしの心に噛みつかれることもあるまいし」
コヴィエッロ　「何とも見事な理由ですな！　それで、つんぼの女なら？」
ドン・ジョヴァンニ　「それこそ理想の女だ。他の恋人の懇願に耳を貸すまいから安心しておれるわ」
コヴィエッロ　「で、唖の女も好きですか？」
ドン・ジョヴァンニ　「好きだね、だって、わしに口を開くのは身振りだけ。愛されている者はそうするものだ。愛が望むのは仕種だけ、言葉はいならい」
コヴィエッロ　「そうしますと、髪のない女はどうなさるんで？」
ドン・ジョヴァンニ　「禿の女か？　好きになるだろうさ。女のなかに、わが運命の象徴を見てとるだろうからな。最愛の女に髪がなければ、愛の鎖から自由に生きられようというものだ」
コヴィエッロ　「びっこで、ちんばの肩をしていたら？」
ドン・ジョヴァンニ　「せむしの女こそ美のアトラスと名付けよう。わしならその女にこう言ってやろう。あなたは両肩にかぐわしき天国を背負っておられるのだと。びっこの女だって素晴らしいではないか。歩くたびにおじぎをするんだからな。だが、お喋りが過ぎたわい。騎士長との約束を果たさねばならん。御夫人方についてはこういうことだ。ヴィーナスとキューピッドの戯れに、巧みな方ならそれで充分、女の短所は何であれ麗しきもの」

A・ベルッチの『石像の招客』三幕二場より

人間万事塞翁が馬

渡邉道英

『人間万事塞翁が馬』『禍転じて福となす』など、古代中国の故事成句は自らの行動や未来を思考する際、大変参考になります。我が人生をふり返ってみる時、まさにこの故事成句が当てはまる事に気付かされます。高校生の頃、父親の影響（元帝国海軍大尉・航空母艦「瑞鶴」の機関長、真珠湾攻撃に参戦）と瀬戸内海を航行する外国船の風景を毎日のように見ていた私にとって、外国船に航海士として乗るのが夢でした。外国船に乗る為には、地元にあった「国立弓削商船高校」では一等航海士の免許が取れないこと、従って『東京商船大学』か『神戸商船大学』に進学するしかなく、懸命に受験勉強に取り組みました。無論当時の国立大学の理数科系は９科目が必須であり、遊んでなど要られませんでした。幸い物理始め数２、数３、幾何が得意だったので高校一年生から一直線に「理数科系進学コース」を専攻する事が出来ました。(愛妻信子も薬学部＆医師を志望し同じクラスに席を置きました）ところがである、『好事魔多し』で、高校三年の秋、志望校「東京商船大学」の願書を提出する際、健康診断で視力がマイナス 0,3 も落ちていて、裸眼１、０以上という一等航海士の受験条件に合わなくなってしまいました。あの時ほど途方にくれたことは有りませんでした。進学指導教官とも相談した結果已む無く『東京藝術大学建築学科』に第一志望校を変更しました。しかし競争率３５倍と言う難関であり、見事不合格になりました。両親に一浪して東京の大学に進学したい旨伝え、受験しないで自宅に篭もってしまいました。数ヶ月は自宅で次のステップを考え続けました。両親との約束で、私立大学には経費の関係から進学出来ないこと。兎に角一浪して大学に入れない時には就職する事にしていました。ともあれ、瀬戸内海が一望できる四国の片田舎で浪人生活に入りました。同じ浪人生活をした同級生も数人いましたが、東京、大阪の予備校に行っていました。田舎暮らしの私は、祖父の農業を手伝って、まさに健康的な日々を過ごしました。みかん山、米麦栽培、各種野菜の栽培など初秋までは真っ黒になって農作業に明け暮れました。



＝自らの人生を大きく転換した決断

さて最後の志望校を決める際、第一にその時の学力で絶対に合格できること、高望みだけは絶対にしないことを決意しました。第二に経費が少なくすむこと。第三に自らの生涯にふさわしい大学であること。確かに昭和 30 年代は日本経済が上向いており、『東京オリンピック』開催の準備で上昇気流の乗っていて、「経済学部」「経営学部」「商学部」に志望が集まり、競争率も高かった。私の長兄は地元の「愛媛大学教育学部卒」で「西条高校の教師」を、次兄は「大阪大学法学部」卒で大学４年生の時『高文官試験』をパスし法務省に確定していた。しかし外交官志望であったため、民官の富士銀行に勤務していました。兄弟と同じ職業には意地でも就きたくなかったし、官僚、大企業のサラリーマン、セールスマンなどは性に合わないと思い込んでいました。外国船に乗る望みが断たれたことから、子供の頃から『図画工作』『書道』が得意で、小中高と「絵画部」「美術部」で活躍してもいた。殊に『今治北高等学校美術部』では東京芸大卒で、二科会の重鎮であった故高階先生が指導教官をされていて、相談した結果『東京教育大学教育学部芸術学科』を薦めていただいた。両親の賛成も得られ願書を提出しました。忘れもしない受験に臨んだ 1961 年２月下旬。宇高連絡船で岡山県児島港。急行『瀬戸』（始発駅）の普通車（三等）に乗車、夜行列車の車内は通路まで座席を得られなかった人達が座り込んでいて、トイレに行くことさえ困難でした。翌日早朝、品川駅到着は午前７時頃であった。学友の叔父さんが日本水産株式会社の重役さんで、麻布の高級住宅に住んでおられ、受験日の二日間と前後合わせて３泊４日の間、お世話になりました。

なお、当時の東京教育大学の試験問題は文部省の方針通り、高校の教科書の中からしか出題しない方針で、東大、京大の様な極端に難しい問題はありませんでした。ただし優しい問題であるだけに平均点が高く、一点差で大きく序列が変ってしまう傾向でした。幸いにも自分なりに１００点満点と思える様な

試験結果でした。更に芸術学科は実技が重んじられていて、絵画、書など実力が無いと評価されませんでした。私の専攻した芸術学専攻は美学・美術史を論理的に表現する力を求められました。筆記試験で自分が選んだ『国宝・山田寺の仏頭』（興福寺所蔵）は白鵬時代の最高傑作と言われた仏像で頭部以外は焼失してしまった傑作。面接試験で恩師「澤柳大五郎教授」「町田甲一教授」両教授の質問に答え『愛に満ちた将来を見つめた眼に惹きつけられました』と答えたことを覚えています。そんなこんなで「サクラサク」の電報が届き、一ヶ月後には、東上線常盤台駅から近い大学の寮「桐花寮」に入った。５００人余の規模の大きい施設であった。当時学長はノーベル賞を受賞された「朝永振一郎」先生で、毎年秋に開催していた「桐花寮祭」にはお越しになって『女の子のスカートとこうした挨拶は短いほど宜しい』といって、すぐさま学生の輪の中に飛び込みお酒を飲んでおられた洒脱な人で、世界の物理学者としての人物像とは違った暖かい人間味の溢れた印象深い先生でした。

山田寺の仏頭：興福寺

＝日本で最初に設立された学校。それは我が母校『高等師範学校』でした！

御茶ノ水の湯島の聖堂跡に現在も中国の哲学者「孔子」の像がありますが、この地に建設されたのが高等師範学校です。明治維新の新政府が最も力を入れた教育者を作る国立の学校であった。全国各地から選ばれた教育者の卵が寄宿舎生活をし、授業料をとるのではなく逆に給金が出た、全て官費で賄われた日本で最初の学校でした。続いて西日本は広島に「広島高等師範学校」が出来、御茶ノ水の高等師範学校は「東京高等師範学校」と名前が変わったとのこと。さらに東京高等師範学校の女子部が独立し『お茶の水女子大学』と『奈良女子大学』が設立されました。同時に、教育者そのものを教える高等教育者を育成するため「東京大学」「京都大学」「北海道大学」「東北大学」「名古屋大学」「大阪大学」「九州大学」）の７つの大学が新設されました。
ところで「一期校」と言われた国立大学の中でも最もやさしいと考え、安易に入学してしまった私ですが、とんでもない勘違いで、本当に素晴らしい大学であることを後になって知ることになりました。
学ぼうとする学生にとってこれほど素晴らしい大学は無いと思える様になりました。特に私が所属した「教育学部」を例に取り上げますと一般的には教職員となる為の専門コースであると考えがちです。それは各都道府県にある大学の教育学部の事であって、当時の東京教育大学・教育学部ほど教職員になることに困難な学部は無いとまで言われていました。つまり先生になる為には教育科目（国語、算数、理科、体育など）をの単位を取り、各都道府県の教育委員会の採用試験に合格しなければなりません。従って、もし数学の先生になる為には理学部の数学科の単位を取得することから始めなければなりません。ところが我が教育学部は『教育法』『教育行政』『教育心理』『特殊教育』などの学問をする学部で、卒業生の進路は文部科学省、各地教育委員会、各大学の教育学部などの専門家多く、高等学校はじめ教職員になるには文学部、理学部、農学部、体育学部で「教科教育法」並びに専門分野（国語、英語、数学、生物、化学、物理）の科目の単位修得が必修です。

⊙今を時めく有名の学者が勢ぞろいしていた国立大学

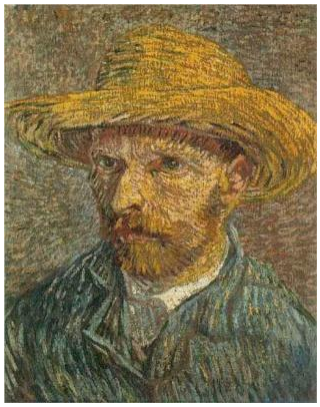
今考えると当時の東京教育大学には若手の力のある教授陣が多数おられた。東大、京大など旧７帝大から前途有望な学者が集められていた様に思えてならない。理学部には京都大学から物理学者「朝永振一郎」「坂田」両先生が、文学部には教科書選定問題で日本国家と対決していた「家永三郎」先生、天皇機関説を表した「美濃部達吉」の息子さんで、後の東京都知事「美濃部亮吉」先生。フランス文学の「河盛好蔵」先生、漢文学者「諸橋轍次」先生、日本史民俗学・日本相撲協会「相撲学校」の初代校長「和歌森太郎」先生、同じく日本史の家元の研究で名高い「西山松之助」先生。私が直接接した先生だけでも凄いと思える先生ばかり。書道の重鎮「西川寧」「上條信山」両先生、工業デザインの基本を創り上げた「高橋」先生。視聴覚教育・優秀映画鑑賞会を運営された「大内茂夫」先生、体育系ダンスの太田先生、文化財保護委員会「沢柳大五郎」先生、シルクローの美術を研究された『林良一』教授、’西洋美術史」の坂崎乙郎先生。この先生方の教室は常に満杯でした。

⊙自分が学びたい事を学ぶ事が出来た大変ユニークな大学。

『東京教育大学』は生徒数より先生方（教授、助教授、助手、そして外部からの講師）の人数が多かったとのこと。少なくとも私達の「教育学部芸術学科芸術学専攻」は一学年の定員が６～７人、それに対し正教授が二人、助手が二人、研究生二人。そのほかに講師が四人おられた。
さらに、夏休みを活用した学外演習で「国立西洋美術館」「国立近代美術館」「東京国立博物館」「京都国立博物館」「奈良国立博物館」さらに「橘寺」「元興寺」「法隆寺」「唐招提寺」、「東大寺」（正倉院、大仏殿、戒壇院、二月堂、三月堂）「薬師寺」「新薬師寺」「當麻寺」などに先生と一緒し学んだことは貴重なことでした。特に橋本凝胤薬師寺元菅主と高田好胤元菅主のお二方は私どもの教授と文化財保護委員会のメンバーであったことから、懇意にされていて、学外演習の時には国宝級の仏像や東の三重塔の内部までご案内頂き、その造形美に感動した事を思い出しています。ある年には、あの東大寺の大仏殿と焼け残った造像当時の「盧舎那仏の蓮弁の繊細な毛彫」を膝の上に登らせて頂き私ども美学生に本物を見せてくださいました。こうした事がきっかけで私の同窓生たちは各々偉大な研究成果をあげ、大学の先生や国立博物館の学芸員として大活躍しました。落ちこぼれの私も先生たちの紹介で、早稲田大学演劇学科や演劇博物館の「郡司正勝教授」「川竹登志夫教授」シェイクスピアから能、歌舞伎の世界に導いて頂き、映画界に入ってから大変役立つ事になりました。

⊙ギリシャ美術、ルネッサンス美術、印象派の絵画を間近に見て人間の素晴らしさに酔っています。

LONDON 生活１６年、嘗て恩師・澤柳大五郎教授が『美学の対象になる美術作品は現物を見ずして語ることはできません、西洋美術を学ぶ皆さんは本物に接する機会が少ない』と案じてくださったが、幸い私はリタイア～してから、ギリシャ、フィレンツェ、ミラノ、ローマで沢山の建築物､彫刻などを見て来ました｡さらにパリやアムステルダムに出掛け、絵画史に残る名作を満足のゆくまで見ることが出来ました。大学のゼミナールで発表した『ゴッホと精神病、画商の弟テオ』（精神病ドクター・式場隆三郎先生のゴッホの研究の影響）は余りにも資料不足と研究不足で恥ずかしい思いでいっぱいになりました｡今後ゴッホの研究を進めたいと願っています。本業である「映画の研究」は勿論のこと。大学で学んだ「ルネッサンスを支えた三人の巨匠（レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、ラファエロ）」（ギリシャ文化の文芸復興）「セザンヌの先生 A・モロー」「色彩の画家ドラクロア」などライフワークとして勉強したい作家と作品が数多くあります。



私の人生の半分は『富士写真フイルムグループ』でのマーケテイングの仕事でした。営業の第一線では東京営業所、仙台営業所でのセールスマネージャーの仕事。さらには本社における「セールマン教育」「商品開発」から「商品販売の企画・販売」私の最大の実績は「デイズニーアニメ映画の全国展開」「デイズニー・キャラクターを活用したアルバム・写真用額縁の製造販売」などでしたが、学生の頃は最も嫌いだった営業活動、商業行為もそれなりに面白いと感じた２５年間でした。しかし５１歳の時、尊敬する社長が退任され、急逝された事がきっかけで円満退社。誘われるままに仙台の住宅産業の営業責任者として、宅地造成事業と分譲、ダイワハウス、積水ハウスなど大手住宅産業とタイアップした、まさしくバブル景気のど真ん中におりました。オーナーは嘗ての東北写真業界のボスとあって、地元出身の大物政治家や仙台市長の要請もあって、もう一つの団地の造成（宅地建物整理組合）をし、そうした団地住宅に飾る「ギャラリー」（書画骨董、彫刻など）を建設、代表取締役専務の肩書で、東京芸大、武蔵野美大、女子美の卒業生に特注で製作を依頼、一点数百万円で購入した作品もあった。この当時の芸術家たちとは現在も、親しい友人関係にあります。そして今だに会員および卒業生として参加している大きな組織があります、それは卒業生として現役で大活躍中の『日本マーケテイング塾』の卒業生が８００人を超えたと言われるマーケケッター（現資生堂社長、モスフードサービス会長など）の集いのことです。私は発足して間がない第４期生の卒業とあって、帰国する度に立ち寄る事が習慣になっています。私の同期でビッグな仕事をした人物に、元慶応大学応援団長だった村林君がいます。彼は一回りくらい下の世代で、東京ガスの営業課長でした。やがて東京瓦斯サッカーチームが母体となってプロサッカーチーム（FC 東京）が発足、当初から営業の責任者でスタート、チームが優勝に絡む様になって、ゼネラルマネージャー（社長）と大活躍しました。現在は母校慶應義塾大学の教授をしています。ともあれ、年金生活の今、昔、学んだことを惜しみなくエンジョイできる時が来ました。人生のゴールまで楽しみ抜きたいと願っています。（了）

鳩　（２部）

ウイリアムズ百子

前号のあらすじ

僕はケンとＯ大学の同人誌「蜘蛛の子」の会合で知り会った。
すぐに自分たちは同種の人間であると直感した。僕の書く詩はいつも激しく
強烈なものであり、ケンの詩もパンチの効いたモダン・ジャス的色彩の濃い詩であった。
そんなある日、一人の女子学生、アサヨ、が仲間に加わった。
無造作に短く刈り上げられた黒い髪が白いうなじ強調し、本人の意図に反して
「女っぽさ」を匂わせていた。
しばしば、大学の近くにある「サロメ」と言う喫茶店を溜まり場として、
３人は時を過ごした。そして、彼女の存在が次第に僕の心を占めるようになると共に、
ある女(ひと)のイメージがそれに覆いかぶさるように浮かび上がってきた。

その女（ひと）は僕の義姉（あね）にあたる人であった。その女（ひと）のことを僕は随分長いこと思い出さなかった。いや、思い出すまいとしてきた。それが昨日会った彼女の顔を思い出している僕の頭の中で義姉（あね）の顔が彼女を突き飛ばすように浮かんできた。

高校１年の春、その女（ひと）は僕の兄のもとに嫁いできた。義姉（あね）は我が家の人になるなり、今まで女気がなくて殺伐としていた家をみるみるうちに清潔に、華やかに仕上げていった。義姉（あね）が家に来て１ヶ月もすると家はすっかり今迄と違った空気で一杯になった。部屋の至る所になまめかしく、花のような匂いがほのかに漂っているような感じであった。

僕の母は42歳の若死にであった。母はその２年程前から心臓が弱く寝付いたきりであたが、僕の６年生の秋、急に心臓がひどく弱り始めた母は11月の或る日、とうとう亡くなった。その日は僕は何時もの様に学校へ行っていた。母の死はある程度ここ数日の間だと予期していたが、父の言葉もあって、僕は休むこともなく登校していた。

5時間目の国語の時間であったが、授業の途中に学校の小使いさんが教室にやってきて先生に何事か耳打ちした。その時、先生と小使いさんがちらりと僕の方へ視線を投げたのを感じた僕はそれがある重大な事であるとわかった。教室中が小さく騒々しい中で僕は恐ろしい想像に抵抗するように教科書の字を一心に読み始めた。それが芥川竜之介の「雛」という短編小説であったことを無性にはっきりと覚えている。心臓の高まりと共に活字がゆらり、ゆらりと揺れていた。先生が僕のもとに歩み寄って、低い声で僕の耳元で言った。「早くお家へお帰りなさい。」と。僕は一瞬、先生の顔を見つめた。男のその先生の瞳が優しく僕を見返した。僕は黙って教科書類を揃え鞄を背負うと教室をゆっくりと出た。
後ろの方から級（クラス）の子の同情ともつかぬ不安ともつかぬ騒めきが僕をしばらく追ってきた。

家に帰ると母は既に死んでいた。胸に白く細い指をしっかりと組み合わせて、軽くて、美しい物体が横たわっていた。顔に被せた白い布を、ツンとした母のかたちの良かった鼻がまるでピラミッドのように形を作っていた。父は母の枕元で膝に手をついて首を垂れていた。親類や近所の者が静かに動いていた。僕はその部屋に入るなり足がすくんで動けなくなったが、次の瞬間、鞄を背負ったままお僕は母に取りすがって、駄々っ子のように泣きじゃくった。その度に、僕の下の物体は小刻みに震えた。そしてどの位泣いていたのであろうか、泣き疲れた僕はそのまま母にうつ伏せになったまま寝入ったらしかった。

誰かが　ー　太い手の感触は、今にして思うと父のように思われるが　ー　僕をそっと母から引き放し、暖かい布団の中に入れるのを夢うつつに知っていた。

当時、東京のＯ大学の三年生であった兄は、その次の日にやっと家についた。背広に身を包んだ兄が急に大人じみて見えた。父も兄も涙一つこぼさず冷静に葬式をすませた。
しかし、僕には、夜になって父が眼鏡の奥でじっと悲しみに耐えているのが、兄が寝床の中で嗚咽しているのが解っていた。

それから４年。女手のない家は　ー　年老いたばあやが一人居たが　ー　義姉がくるまで、カラカラに乾いた暮らしであった。父は市役所の厚生課長で４８歳という男盛りであったから、再婚の話も幾つかないでは無かったが、僕への影響を恐れてか、とうとう再婚しなかった。翌る年、大学を卒業した兄も家に帰ってきて市内の或る大きな証券会社に勤めた。僕は母の死後、ばあやを除いて女の人をま近かに眺めたことも、側に近寄ったこともなかった。中学校、高等と僕は何故か、頑固に男子ばかりの私立の学校へ入ることを主張した。
兄が嫁を貰うと決まった日、僕は珍しく興奮した夜を迎えた。多分僕ばかりでなく、父もそうであったろう。皆んな何事もない風を装っていたが、その実、約 4 年もの間、女気がなかった我が家に若い女性がくるというので３人共大分慌てていた。
ばあやは義姉が来ると入れ替わりに里へ帰っていった。
兄嫁は兄と二つ違いの２３歳であった。とりわけ美人というのではないが、白い艶艶した肌とちょっと上向きかげんなちんまりした鼻が何とも初々しかった。全体に小柄だが洋服でも和服でも良く似合う体つきであった。僕等四人の生活は順調に進められた。

父も元気だったし、兄も照れ臭そうだが見合い結婚の割に仲良くしていたし、僕も何となく満ち足りた気分になっていた。僕はちょっとした弾みに義姉に触れたり、台所やその他の狭い場所で義姉の近くを通ったりした時、白いエプロンの胸元から母と同じ匂いを嗅ぎ取った。そして又ご飯を食べる時、仕事を手伝っている時など、かすかに触れる手の感触は母より随分と肉づきがよかったのだが、僕に母を思い出させた。

今考えてみると母の匂いと感じたのも女性共通の化粧品の匂いであったのだろうが、母以外の女性を知らない僕が母のそれと錯覚をおこしたのも当然のことであったろう。
ともあれ、僕は義姉の中に母と同じものをみつけては、１２歳で突然に打ち切られた母への感情を吹き返していった。それは４年間という大きな空白を脱してみて、始めてその空白が自分にとって長かったかが意識され、その反動として起こったように、母への慕情、女性への憧れが僕の体内に関を切ったように流れ始めたかのようであった。しかも16歳になっていた僕にはそれは自然な生理的なものであった。
確かに、始め僕は義姉の中に母を求め、母を感じていた。しかし、僕の体内が男として成長していくにつれて義姉は僕にとって一個の女性に変わっていった。僕にとって母は永遠の憧れであり、義姉は僕の一番身近に接する「女」であった。
そしてその頃から、つまり高校 2 年の頃から僕は詩を書き始めた。それは僕の男としての体臭が生み出す、血のにじむような格闘の末の結晶であった。僕は夢の中で何度罪をおかしたかしれない。

義姉は僕を可愛がってくれた。時として兄のことよりも僕の方をより以上にかまってくれたりもした。義姉にとって僕はかわいい義弟であった。しかし、兄と義姉が一緒に居るところに偶然　ー　僕はそういう場面に行きあうことをなるべく避けていたが　ー　来合せると、兄に対する嫉妬ともつかぬ、義姉に対する憤怒ともつかぬ感情に襲われ、一人涙をにじませた。その頃の僕は確かに異常であった。

高校 3 年になってまもなくたったある日のことであった。風邪で欠席して寝ていた僕の部屋に義姉は優しく朝食をもってきた。熱で浮かされているような僕の眼に下から見上げる義姉がしっとりと映った。
父や兄を送りだした後、僕の所に朝食を運んできたのだが又すぐにお勝手の方へ引っ込んでしまった。僕は辺りに軽やかに舞っている香を目をつむったまま一息ごとに吸い込んだ。11 時頃、朝食の片付けや、朝掃除を済ませた義姉が僕の部屋にやってきた。動いたせいか狭い額に小さな汗の粒が吹き出て、おくれ毛が 2－3 本首筋にペッタリとはりついていた。義姉は僕の部屋に入ってくるなり手のついていない枕元の朝食に目をやり「あら、未だたべて

ないの。不味いからかしら？」とちょっと首を傾げ尋ねた。僕は「食べたくなかったから食べなかったんだ。」と拗ねたように、投げやりに言うとくるりと壁の方に寝返りをうった。彼女が僕の近くに座る物音を背中に感じながら壁を見つめていた。
彼女は白い手を伸ばして僕の額に手をあてた。「きっと熱があるからなのね。」と言う、彼女のふっくらとした、だが冷たい手の感触が熱っぽい全身を快く貫いた。
　僕は突然、彼女の手首を掴み、ぐっと引き寄せた。彼女は何の抵抗もしないで、ぐにゃりと僕の上に倒れてきた。その目は笑っていた。始め、僕のこの突然の行動を冗談だと思っていたらしくクスクスと笑うたびに、倒れた彼女の小刻みな振動が布団を通して伝わってきた。「この大きな赤ちゃんのいたずらにも困ったものね。」と言いながら起き上がろうとする彼女の眼が僕の眼を見つめた。
　おおかた、その時の僕の眼がどんなものであったか想像がつく。彼女は急に真顔になると腕に力を入れ、本気に起き上がろうとした。僕は増々強く引き寄せると僕の眼の前で小さく開いて、あえいでいる口唇に僕の口唇を重ねた。彼女はそのまま僕の上にしなだれかかると、しばらくそのままの姿勢で横たわっていた。方針したような恰好で痴呆のように、その体は投げ出されていた。
　どの位であったろうか、恐らく今考えてみると長い時間では無かったが、突然、義姉はピクリと動いて開いた目に恐怖の色を漂わせ僕の布団の上から自分の身体をはがした。僕はうつ伏せになると枕に顔を押し付けた。彼女が部屋から去っていく静かな、そして哀しい足音が畳を伝わって僕の耳元で遠い懐かしい足音のように鳴っていた。
　義姉もその翌日から風邪で１週間ほど寝込んだ。誰も何も疑いなどしなかった。そのことがあって、僕は家を出るため東京のＯ大学へ進学することを決心したのであった。（次号に続く）

遠い日の思い出

須永静江

私と弟とは、５歳違いである。私は、弟が生まれた時、自分が「お姉さん」になった事を近所に自慢して歩いた。今、思うに、戦後数年の日本では、どこの家でも子供が多く、子供が生まれた事を自慢して歩くこと自体､近所で歓迎されたかどうか疑問である。しかし、近所は、本家を囲む姓を同じくする何軒かの新宅と、江戸時代の名残りと思われる班のまとまりが強く、冠婚葬祭のみならず、恒例の春秋の村祭りなど、事あるごとに一箇所に集まって、賑やかに飲み食いをする習慣があったから、弟の誕生を触れ回った私は、近所隣りが集まって賑やかに誕生祝いをする前触れの役を果たしたかも知れない。

弟は、私の人生の中に、ずっと、赤ん坊の時から存在して来た。しかし、良く考えてみると、私の人生の中に、弟が存在しなかった時期が、５年と１５日間あったのである。私は、誕生から弟が生まれるまでのこの長い時間をどう過ごしたのだろうか？

当時、村に住む子供達は、幼稚園に行かなかった。第一、そのようなものがあること自体、私達は知ら

なかった。私には、姉や兄たちが居たが、学校に通っていたから、当然、妹の私の面倒はみられなかった。私は、両親が、田畑に働きに出る時、一緒に連れて行かれたのかも知れない。一つだけ、良く覚えているのは、「良く晴れた春の日。田んぼの畦に座って、雲雀が空高く囀り、舞い上がって行くのを、のんびりと見上げている自分の姿である。」広い田んぼの片隅には、家から連れて来られた大きな赤牛が、田んぼを耕す仕事を待っていた。この雌牛は、私のお父さんの言う事だけはよく聞くのであったが、子供たちが嫌いなのか、私が嫌いなのか、私が近くに行くと、フッウッーと、鼻息も荒く追い返すのであった。

弟が生まれて、前庭に出された乳母車に乗せられた時、私の胸は一瞬、キューンと痛んだ。その乳母車が私の物で、弟に取られてしまった、と、思ったせいか、或いは、ただ単に、「私は、もう、大きくなり過ぎて、二度と、乳母車には乗れない。」と言う、一種の郷愁だったのか、理由は定かではない。

弟は、６月の１４日生まれで、農業を営む両親は、一年で一番忙しい時期を迎えていたと思う。そこで持って、学齢前の子供が２人も居ては、足手まといで仕事にならなくなったのだろう。間も無く、家に、「喜平」と言う子守番頭が雇われて来た。この人は、私達の住む母屋には住まず、別棟にある離れに住んだ。そして、毎日、弟を背中に負ぶい、どこに行くにも私を連れて歩いた。

喜平は不思議な人で、両手で、ホーホーと鳥の声を真似た音を出し、小鳥を自分の手に呼び寄せる技を持っていた。寂しそうな人であった。私たちは、言葉を交わしたことが有ったか、無かったか？ 私は、恐らく、理由も分からず、ただ、この人のする事を何でも、真似したと思う。

ある夏の夕暮れ、私は、病気で倒れた。この人が、青梅に塩を付けて食べたのを、私も真似たらしい。熟れない青梅には、青酸カリというものが含まれていて、それは、毒なのだそうだ。この出来事が、私の人生をすっかり変える原因になった。

良くは覚えていないが、その後、私の胃は、食べ物を一切拒否し続けた。母は、「お前は、吐くものがなくて、煤水(すす水:実際は、血? かと思う)まで吐いたのだよ」と、言っていた。薄暗い寝室に、大きな瓶が逆立ちになってぶら下がっていた。そこから、管が降りて来て、私の両方の太腿に液体を注入していた。毎日、熱っぽく、大義で、髪の毛が薄切れる程、右に左に頭を動かし続けた。多分、母親や姉たちが代わる代わる、水枕を取り換えてくれていたと思う。この状態が、どれだけ続いたのかを私は知らない。もうダメ？ と、医者が言ったのか？家人が思ったか？父は、今晩が最後だろうと、私を抱いて寝た、と言う。夜の更け行くにつれ、次第に、体が冷えて行った。農作業で疲れた父は、トロンと、一瞬なりとも眠りに落ちたのだろうか？ 明け方近くになる頃、何と、私の身体は、ホカホカと暖かくなり出したのだそうだ。「この子は、助かる！」と、父は思った、と言う。

翌年の４月、私は、普通の子と同じように小学校へ入学した。ところが、梅の実が大きくなる雨季の時期になって、私の健康は、再び、大きく落ち込んだ。学校へは、３ヶ月も行けず、近所の同級生が給食に出たジャム付きコッペパンを毎日届けてくれた。家で、一人、日長(ひなが)夜長(よなが)、熱っぽい体を横たえていた私には、毎日立ち寄ってくれる同級生の姿は、梅雨間の晴れのスナップショットのように、明るく、まぶしいものであった。そして、私は、毎日、友だちを待った。

その後、二年生で２ヶ月の欠席、三年生で１ヶ月の欠席。学年を重ねるにつれて、私は丈夫になって行った。小学校卒業の時、英語辞書付きの市長賞と卒業年度の皆勤賞を貰った。市長賞は、300 人を超える卒業生のうちの一人に与えられる名誉賞であっただろうが、私にとって貴重な物は皆勤賞であった。私は、１日も休まずに一年間登校出来たのである。私は、これを境に健康に自信を持ち、普通の中学生として出発した。

和風の奈良基督教会
その３　奈良公園誕生

清瀬みさを

前回の「和風の奈良基督教会」その 2「過去の國　大和」では、明治維新とともに「いにしえのならのみやこ」が過酷な時代の荒波に揉まれ無残に落剥した経緯をご紹介いたしました。

夏の夕刻になると、奈良国立博物館前の芝地に出現する 100 頭余りの「鹿だまり」あるいは「鹿団子」がニュースになります。「猿団子」という言葉はありますが「鹿団子」というのは今様の日本語です。ねぐらに帰る前に鹿の群れが集まり、博物館の地下回廊の換気口から流れるひんやりした空気で涼むのではないか、と言われています。武甕槌命（タケミカヅチノミコト）が常陸國から柿の枝で御して奈良に影向(ようごう)してきたという白鹿伝説から鹿は春日大社、興福寺の神獣となりました。けれども鹿も大和の國と運命を共にして維新直後に鹿鍋にされ受難の時期を過ごしたことは前回ご紹介いたしました。

現在、鹿だまりの周りにわらわらと人垣をつくる国内外の観光客には、想像だにできないような日本の近過去がありました。今では鹿と「奈良公園」はセットであり、国立博物館前の鹿だまりは、すっかり「奈良公園」夏の風物詩になっています。

ここで少し、「公園」という言葉の淵源をたどっておきましょう。「公園」という言葉は、北魏の正史『魏書』（6 世紀）中に官有の庭園という意味で使われていましたが、日本にはその言葉は根付きませんでした。明治以前の日本に人々が集う社寺の境内地や遊興の地は存在しましたが、「公園」というのは明治期に政府主導で設置された都市の新たな施設でした。そしてその単語は、明治初期に英語の public garden　を直訳した翻訳語でした。残念なことに、public garden 、square、park の内容的区別なく、一律に「公園」と呼ぶことになりました。そのために日本国内の「公園」は、国立公園から町内の児童公園まで千差万別の形式や内容をもっており、あらためて考えてみると「公園」とはなんぞや、という疑問にとらわれるむきもありましょう。

明治 6 年のこと、政府は、太政官布告 16 号によって「万人偕楽ノ地」となす公園制度の発足と適切な用地選定を促すよう府県に布達しました。そこで、まず、かつての有名社寺を立地として東京の上野公園、京都の円山公園、奈良公園が設置されました。奈良公園は、堺県時代の明治 13（1880）年に興福寺境内地 14 ヘクタールの敷地に開園しました。現在、都市公園法に基づく「奈良公園」は猿沢池、荒池、若草山、春日山、芳山、春日野など山林一帯を含む 502 ヘクタールですが社寺、博物館は含みません。一方、文化財保護法によって指定された「名勝奈良公園」は興福寺、東大寺、登大路に面した民間地まで含む 524 ヘクタール、さらに広義での奈良公園は上記のふたつの公園地に国立博物館、春日大社を含めたエリアを意味します。大変ややこしいのですが、「奈良公園」が指す空間は、枠組みによって異なっています。

明治政府は巨大寺院であった興福寺を廃絶し、領地を上知し官衙街(図 1・図 2)とする一方で、文化の近代化政策のひとつとして「奈良公園」を設置し、明治 27（1894）年に奈良公園の真ん中に奈良帝室博物館（現・奈良国立博物館　図 3）を建設しました。「奈良公園」と博物館の設置は、言葉を換えると興福寺という過去の権威を破壊し、西洋に倣う施設にすげ替える日本近代化の象徴でもあったのです。

しかし、一方で「奈良公園」の設置は、風致の保存という観点で奈良復活の生命線ともなりました。それは、内務卿・伊藤博文による明治 13 年 2 月 14 日

付の奈良公園認可書中に朱書で記された文言に認められます。曰く、「・・・今般公園ニ相成候上ハ、他日学校地ニ充候トモ、園地之儀ニ付、地景変更、且樹木伐採等ノ儀ハ総テ不相成儀ト相心得事・・・」。以降、この伊藤の記した文言が、奈良公園地の風致・自然の保護、官有地であっても公園内には学校建設も許されないという金科玉条の盾となったのです。

昭和 57(1982)年に奈良県は 550 ページ余の本編と自然編、附図からなる大部な『奈良公園史』を刊行しました。そこに仔細収録されている膨大な史料、記録から、公園管理の主体は堺県、大阪府、奈良県と移行しましたが、奈良公園の成立と整備に連綿と費やされた膨大なエネルギーこそが、奈良近代のアイデンティティ形成の主軸として機能し、時代を追って拡大していった奈良公園の空間がその装置であったことが理解されます。

伊藤の言は今日まで、強い拘束力を保ち、奈良公園運営の方針は、植物、街灯、ベンチにいたるまで、和風に統制されてきました。明治政府が興福寺の伽藍を破壊させ、その部材でもって建設させた擬洋風建築の学校・寧楽書院や旧政庁舎が「狭隘ニシテ不便ヲ極メ且ツ其位置ハ風光ノ勝地タル奈良公園ノ中ニシテ其ノ美観ヲ損スルノ故」に、県政回復した奈良にとって新築移転が至上命令となったわけでした。そのような「和風」を旨とする奈良公園の中で、宮廷建築家・片山東熊が設計した明治 27 年洋風建築の奈良国立博物館は都市公園法および文化財保護法が法的に定めるいずれの「奈良公園」からも除外され、周囲の景観から浮いてひとりぽつねんと公園内の芝地にたたずんでいるように見えます。

次回は、この博物館の洋風が奈良のアイデンティティを鮮明に意識させる力学として機能し、同時期に建設された旧県庁舎の形式、それ以降の奈良ホテルから奈良基督教会まで「和風」という厳しい縛りを課すことになった経緯をご紹介したいと思います。

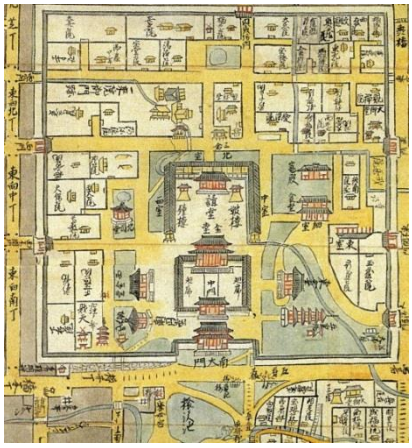


図１　官衙街

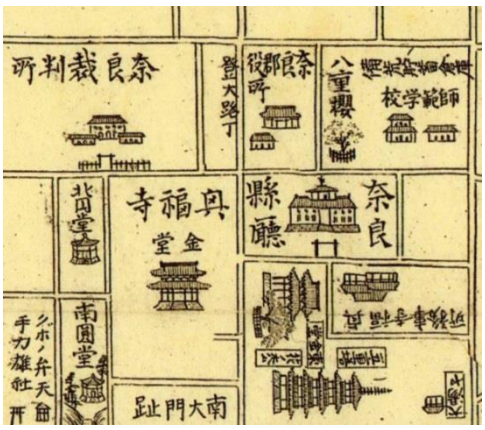
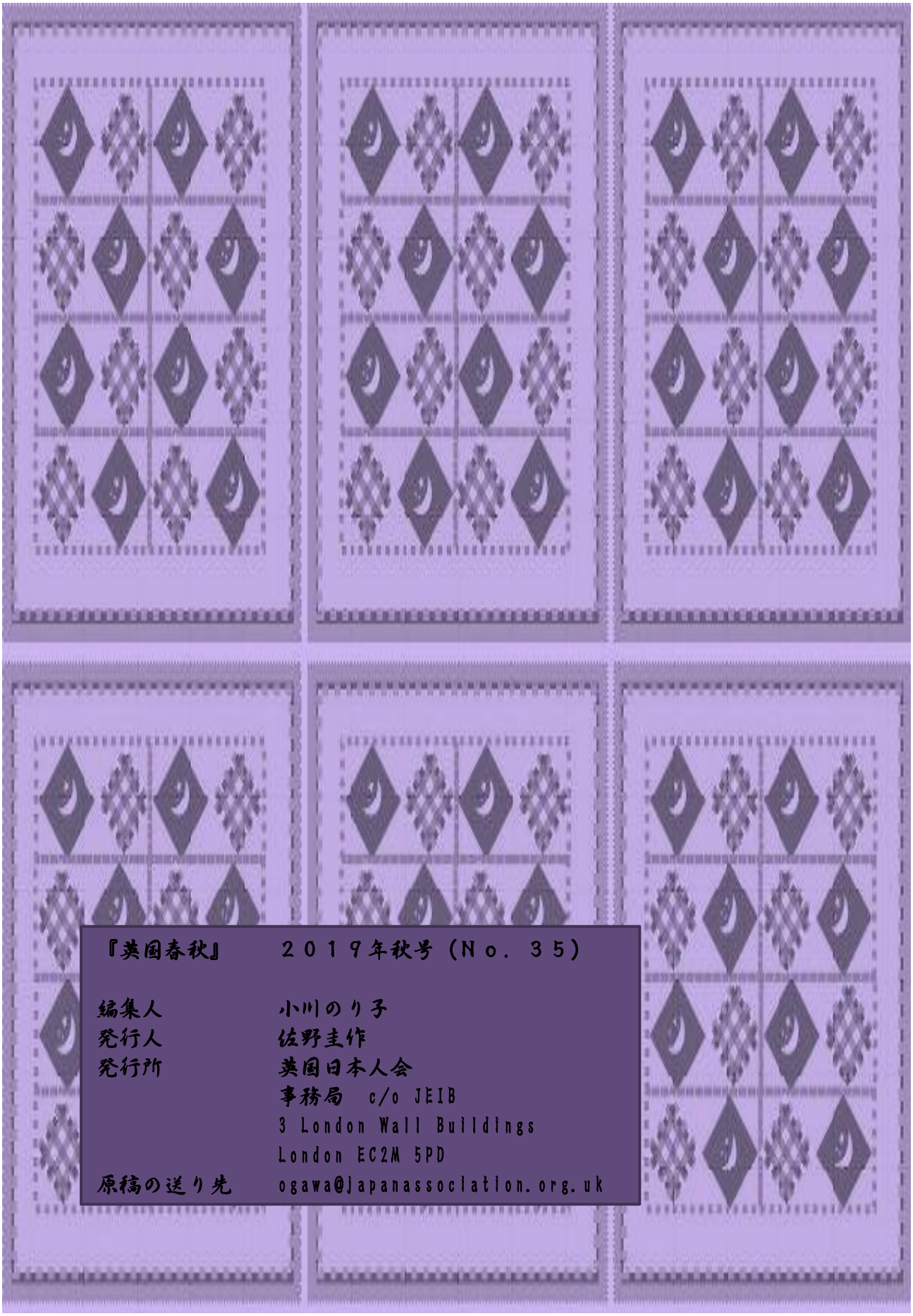


図２　官衙街

図３　奈良帝室博物館（現・奈良国立博物館）



『英国春秋』　２０１９年秋号（Ｎｏ．３５）

編集人　小川のり子
発行人　佐野圭作
発行所　英国日本人会
事務局　c/o JEIB
3 London Wall Buildings
London EC2M 5PD
原稿の送り先　ogawa@japanassociation.org.uk